

誰一人取り残さない「自ら判断し行動する」防災学習

-外国にルーツのある生徒への言語支援の工夫と、実践的避難訓練の効果検証-

2026年3月

松阪市子ども支援研究センター

長期研修員 河田 麻佑

はじめに

我が国では平成7年の阪神・淡路大震災を皮切りに、この約30年間の内に、東日本大震災、御嶽山噴火、熊本地震、平成30年7月豪雨、令和元年東日本台風、令和2年7月豪雨、能登半島地震を始め、多くの自然災害が発生してきました。特に発生が切迫している南海トラフ地震については、防災対策実行会議のワーキンググループから令和7年3月に被害想定が公表され、最大で死者数が約29.8万人、災害関連死者数は少なくとも約2.6～5.2万人、経済被害は資産等の被害だけでも約225兆円など、まさに国難級の大規模災害になることが危惧されています。災害対策基本法に基づき設置された中央防災会議では、災害から国土や国民の生命、財産を保護し、秩序の維持と公共の福祉を確保するため、防災基本計画の作成や防災に関する施策の審議等が行われています。現在は、事前防災から復旧・復興まで一貫した取組を一体的に推進すべく防災庁の設置に向けた準備が進められているところです。

三重県では、令和6年策定の三重県地域防災計画において、県や市町、防災関係機関が中心となって防災・減災対策に取り組んでいくことはもちろん、防災の日常化という概念のもと、事業者、地域、県民等が果たすべき責務、役割を明確にし、「自助」「共助」「公助」が一体となった防災対策体制を構築しています。

松阪市では、教育ビジョンにおいて、家庭や地域と連携した防災教育の充実や、被害を想定した地域に根ざした防災訓練の推進を掲げています。また、子どもたちが地域の支援者として自ら行動できる力や態度の育成にも取り組んでいます。さらに、10月第4日曜日を「松阪防災の日」に定め、防災対策を日々の生活と一体的に進めることで、防災ビジョンである「災害時の人的被害ゼロ」の実現をめざしています。

本研究では、“誰一人取り残さない「自ら判断し行動する」防災学習”と題して、外国にルーツのある生徒への言語支援と手立てを含む、すべての生徒を対象とした実践的避難訓練の効果検証を行いました。避難時の具体行動の定着や避難所運営への主体的な参画など生徒の防災意識の向上と、教職員の判断・対応の自己効力感の向上、情報伝達の手順や連携などの成果を得ることができました。同時に系統的な防災学習の必要性と実践的避難訓練の普及と継続が課題としてみえてきたため、松阪市の防災教育の改善・充実につなげていきたいと考えております。

最後になりましたが、関係者の皆様のご理解とご協力により、ここに研究集録第150集としてまとめることができました。深く感謝申し上げます。

令和8年3月
松阪市教育委員会事務局
子ども支援研究センター
所長 中西 祐司

目 次

I 研究主題と目的	
1 研究主題 -----	1
2 主題設定にあたって -----	1
3 研究の目的 -----	1
II 研究に対する基本的な考え方	
1 市内の取組 -----	2
2 研究の仮説 -----	5
3 仮説の検証と研究の方向性 -----	5
4 研究協力校について -----	5
III 実践と考察	
1 【検証1】A中学校第1学年における防災学習 -----	7
2 【検証2】A中学校全学年における防災学習 -----	21
3 【検証3】B中学校における実践的な避難訓練 -----	30
IV 研究のまとめ	
1 言語的な課題に左右されない学びの保障 -----	49
2 判断する場面を設定した実践的な授業と、避難訓練の計画・立案 -----	50
3 今後の展望 -----	51
4 研究を終えて -----	54
5 参考文献 -----	55
巻末資料	
1 市内の防災学習の取組-----	56
2 A中学校の授業で活用したキキカード-----	64
3 B中学校の避難訓練に向けた事前学習と避難訓練の詳細-----	67
4 B中学校の避難訓練で活用した協力者カード-----	73
5 授業で活用した教材のリンク集 -----	76

I 研究主題と目的

1 研究主題

誰一人取り残さない「自ら判断し行動する」防災学習

－ 外国にルーツのある生徒への言語支援の工夫と、実践的避難訓練の効果検証 －

2 主題設定にあたって

近年、全国的に集中豪雨や台風等による大規模な風水害が多発し、南海トラフ巨大地震による危機が迫っている中、これらの災害に備える重要性は一層高まっている。松阪市も例外ではなく、海岸部では津波、山間部では土砂災害といった地域特有のリスクがあり、地域に応じた防災訓練が必要とされている。このような状況から、学校における防災教育では、児童・生徒が自分の命を守り、地域の一員として災害に備える力を身につけることが重要となる。文部科学省も、「日常生活において危険を適切に判断し、回避するために最善を尽くそうとする主体的な態度を育成する」ことを防災教育の方向性として示している¹。つまり、「知識や技能の習得にとどまらず、災害時の限られた情報の中で危険を判断し、命を守る行動を選択・実行できる力を育てる」ことが、学校の防災教育に求められる。

また、松阪市は5800人を超える外国人住民が居住している。松阪市教育ビジョンでは、外国人の子どもたちを「共生社会の一員として将来の松阪市を形成する大切な存在」と位置づけ、体系的な指導や支援体制の構築等、多様な背景をもつ児童・生徒が学ぶことを前提にした取組が求められる。私自身、校内の約1割を占める外国にルーツのある生徒と向き合う中で、言語的な課題を理由に十分な理解が得られない学習場面を、繰り返し目にしてきた。特に、防災学習は命に直結する学びであり、すべての児童・生徒が言語的な課題に左右されることなく、自らの命を守る行動をとれるようにすることは、学校が果たすべき責務であると強く感じている。こうした背景から、外国にルーツのある児童・生徒に対しても、言語的な課題に左右されることなく学び、行動に移すことができるよう、多様なニーズに対応した「誰一人取り残さない」授業設計や教材開発の工夫が不可欠である。

以上を踏まえ、本研究では、誰一人取り残さない防災学習の実現に向けて、「自ら判断し行動する」力を育成するための授業や避難訓練を設計・実施し、効果を検証する。

3 研究の目的

すべての児童・生徒が、自然災害や身近な危険に備え、主体的に「判断し行動する」力を育成するために、防災学習に資する教材の開発を進めていく。

¹ 文部科学省「自然災害に対する学校防災体制の強化及び実践的な防災教育の推進について」(令和元年12月5日)

II 研究に対する基本的な考え方

I 市内の取組

松阪市は、東側に湾、西側に山地を有する広大な市域を持ち、地理的条件により多様な災害リスクを抱えている。海岸部では津波による被害が予想され、山間部では土砂災害の危険性がある。また、市内には河川が多く、大雨による内水氾濫の恐れがある地域も存在する。このように、学校が置かれた環境によって想定される災害の種類や対応は大きく異なる。

こうした多様な防災課題を踏まえ、市内の防災教育の現状を把握するために、小学校 9 校、中学校 7 校を視察した。視察対象は、海岸部、山間部、河川近く等、異なる災害リスクを抱える学校を網羅的に選定した。また、三重県教育委員会学校防災アドバイザーや、松阪市防災対策課、社会福祉協議会に所属する防災ボランティア団体に関わる防災事業も視察対象に含め、地域と連携した取組の実態を把握した。

視察にあたっては、各校がどのような目的のもとで防災学習に取り組んでいるのか、授業や避難訓練の内容、児童・生徒の様子を中心に観察した。これにより、防災教育の多様な実践を整理し、研究に生かすための知見を得ることを目的とした。

以下に、視察で得られた防災学習の取組を、①様々な避難訓練、②地域とつながる防災学習、③外部機関を活用した防災学習、④校外学習とつなげた防災学習の4つの視点から整理する。(それぞれの事例の詳細は、巻末資料に記す。)

①様々な避難訓練

児童・生徒が主体的に命を守る行動を身につけるため、避難訓練に多様な工夫が取り入れられていた。「命を守る姿勢」の実践や、「おはしもち」の徹底、津波避難におけるライフジャケット着用と垂直避難、停電や余震を想定した対応、危険箇所を確認する訓練等に取り組んでいた。

②家庭や地域とつながる防災学習

保護者や地域住民、自治会、コミュニティ・スクール(CS)と連携し、発災時の避難所運営を体験するリアル HUG²や、地域住民が参加する避難訓練、親子で学ぶ防災教室、CSを活用した防災学習等、学校と地域が協働して取り組んでいた。

² HUG:2007年に静岡県が開発した、避難所(Hinanzo)・運営(Unei)・ゲーム(Game)の頭文字を取った防災教材。避難者の年齢・家族構成・事情等が書かれたカードを体育館等の図面上に配置し、発生するイベントにも対応することで、避難所運営の課題や判断の難しさを体験的に学ぶシミュレーションカードゲーム。

③外部機関を活用した防災学習

防災を「体験を通して学ぶ」取組が進められていた。避難所で使用する資機材の取扱い訓練や、起震車による地震体験、消防や自衛隊による実技指導、气象台による気象実験、防災ボランティアとの協働等、児童・生徒が実際に体験しながら学ぶことで、防災に対する理解と実践力を高めていた。

④校外学習とつなげた防災学習

防災学習を校外活動と結びつける取組が進められていた。地域を歩き危険箇所を見つけるタウンウォッチング、防災関連施設の見学、ショッピングモールでの街頭調査、修学旅行に向けた事前学習等、実際に地域の施設を活用する学習を通して、児童・生徒が防災を身近な課題として捉える工夫が見られた。

他にも、松阪市防災対策課や三重県教育委員会による、能登半島地震の災害派遣に関する内容を含む防災講話や、避難所について学ぶ「HUG」や「ひなんじょなんナン?」³の実施、防災ノート⁴を活用した授業等様々な取組が見られた。

市内の防災教育の視察で得た所感を、以下に示す。しかし、この所感は、授業の流れや活動の様子、児童・生徒の反応を見て整理したものであり、アンケート調査等で学習効果を測定したわけではない。そのため、因果関係の断定はできないが、全国調査の研究結果や国の方針と照らし合わせながら、現時点の見立てとしてまとめる。

〈学習効果が高いと感じた点〉

(1)「体験活動」を取り入れることで、理解が深まり具体化しやすい

- ・実際にやってみる・見てみる活動がある場面では、児童・生徒が「なぜそうするのか」を考えたり説明したりする様子が見られた。
- ・文部科学省は、防災教育において、危険予測の演習や避難訓練等の実習等、いろいろな方法を取り入れて、主体的な行動につながる工夫が大切だとしている。⁵

(2) 防災学習におけるカードゲーム等は「考えて判断する時間」をつくりやすい

- ・カードゲームやロールプレイでは、情報を整理してどう動くかを選ぶ場面が自然に生まれていた。

³ ひなんじょなんナン?: 三重県・三重大学みえ防災・減災センターが開発した、避難所生活をイメージし、避難所で起こりうる課題や必要な設備、思いやり行動について学べる防災カードゲーム。

⁴ 防災ノート: 三重県教育委員会が、児童・生徒が自然災害の危険や避難方法、家庭での防災対策を学び、自ら命を守る力を育てる目的で作成した教材。

⁵ 文部科学省 学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開(平成25年改訂)

(3) 備蓄や器材等「本物」に触れると、行動につながりやすい

- ・実物を見たり触れたりすると、「何をどうするのか」が想像しやすくなり、知識を具体的な行動や判断に結び付ける上で有効であるように見えた。
- ・文部科学省が示す「資料や教材の活用」「実習の導入」といった方向性とも合っている。

〈課題として気になった点〉

(1) 全員が十分に理解して参加できているとは限らない

- ・活動に参加していても、意図や手順をよく理解していないまま動いているように見える児童・生徒がいる場面があった。
- ・柴田真裕らによる全国調査⁶では、「防災教育が年1～3回程度の学校が多く、体系的に続けにくい」ことが指摘されている。学習機会が少ないと、理解の定着が難しくなる可能性がある。

(2) 知識を伝えるだけでは、判断する場面が少なくなりやすい

- ・説明中心の授業では、児童・生徒が自分で考えて決める場面が少なく、受け身になりやすいように見えた。
- ・柴田真裕らによる全国調査において、「“講義、外部講話、映像”は基本的に受け身型の学習方法であり、“グループ、調査、実験、体験学習、課題学習”といった、いわゆるアクティブラーニング型の学習方法は非常に少なく、特に中学校や高等学校ではほとんど行われていない。」と、課題が挙げられている。

(3) 外国にルーツのある児童・生徒への言語面の配慮が必要

- ・指示や説明が難しいと、理解が追いつかないまま活動が進む可能性がある。そのため、防災学習でも、言語理解の支援や情報提示の方法に工夫を凝らし「参加できる条件」を整えることが大切だと考えられる。

以上は、視察から見えたことを整理した所感であり、効果や原因を実証したことはないが、全国調査で示された「定着の難しさ」や「受け身型教材の多さ」等の課題や、文部科学省が求める方向性（主体的に考え行動につなげる工夫）と重なる点が多い。

そこで本研究では、言語支援を含む工夫を取り入れ、判断する場面を設定した授業と実践的な避難訓練を設計、実施、評価し、「誰一人取り残さない、自ら判断し行動する」防災学習について検討する。

⁶ わが国の学校における防災教育の現状と課題—全国規模アンケート調査の結果をもとに— 柴田 真裕, 田中 綾子, 船木 伸江, 前林 清和 (2020年)

2 研究の仮説

児童・生徒が主体的に判断し行動する力を育成するためには、判断する場面を設定した授業や実践的な避難訓練が効果的である。

3 仮説の検証と研究の方向性

本研究の目的は、前章でも述べたように、すべての児童・生徒が自然災害や身近な危険に備え、主体的に「判断し行動できる」力を育成するための教材を、開発することである。本研究では以下の3つの視点を軸に、教材の工夫と効果の検証を行う。

(1) 言語的な課題に左右されない学び

外国にルーツを持つ児童・生徒を含めたすべての児童・生徒が、災害時に必要な情報を理解し、適切に行動できるよう、工夫して授業設計や教材作成を行う。

(2) 判断する場面を設定した防災学習

ロールプレイやシナリオ型学習を取り入れることが、生徒が主体的に判断し行動する力を育成することにつながるかを検討する。

(3) 傷病者発生を想定した実践的な避難訓練

事前学習と避難訓練を連動させ、より実践的な訓練を実施する。実際の地震発生時には、揺れやパニックにより3割～5割の確率で傷病者が発生している事実を踏まえ、傷病者対応を含む避難訓練を行い、声掛けや臨機応変な判断が求められる場面を設定する。

これらの検証を通じて、「児童・生徒が主体的に判断し行動する力を育成するためには、判断する場面を設定した授業や実践的な避難訓練が効果的である」という仮説を検証し、誰一人取り残さない防災教育の実現に向けた方策を明らかにする。

4 研究協力校について

本研究では、松阪市内の中学校の中から、異なる防災課題を抱える2校に研究を依頼した。研究協力校の選定にあたって、外国にルーツを持つ生徒の在籍状況や、学校の立地条件、防災学習の取組状況を考慮した。

1校目(A中学校)は、市内で有数の大規模校であり、全校生徒の約1割が外国にルーツのある生徒が在籍している。学校の所在地は津波避難目標ラインより山間部に位置しているが、津波ハザードエリア内に居住する生徒も一定数存在し、2024年の台風10号では、校区内の川が氾濫寸前に迫り、レベル5の避難指示が出た。日常から、防災ノート等を

活用し防災学習に取り組んでいるが、外国にルーツのある生徒も含めたすべての生徒が思考できるような授業設計には、改善できる余地がある。このような背景から、「誰一人取り残さず主体的に判断し行動する力を育成できるような判断する場面を設定した授業」を検討する場として適していると考え、研究協力を依頼した。

2校目（B中学校）は、市内の中でも、特に海に近い位置にあり、津波からの避難が必要な学校である。A中学校同様、2024年の台風10号では、校区内の一部地域で内水氾濫による浸水被害があり、防災学習の重要性が改めて認識された。入学当初から津波避難や防災についての指導が行われ、2年生では防災を柱とした探究学習に取り組む等、防災教育に力を入れている学校である。一方で、日頃から津波避難を想定した避難訓練を実施しているが、その内容は例年通りの形式的な訓練が続いている。このように、防災教育の基盤がある上に、さらに訓練の内容をより実践的に改善できる余地があることから、「主体的に判断し行動する力を育成できるような実践的な避難訓練」を検討する場として適していると判断し、研究協力を依頼した。

Ⅲ 実践と考察

Ⅰ 【検証Ⅰ】A 中学校第Ⅰ学年における防災学習

①実践に取り組むにあたって

本実践は、研究の目的である「災害時に児童・生徒が主体的に判断し、行動する力を育成する防災教育のあり方」を検証する過程で実施したものである。外国にルーツのある生徒を含め、すべての生徒が、災害に対する正しい危機意識を持ち、災害発生時に命を守る行動ができることをめざし、授業設計と教材作成の工夫を行った。

教材設計においては、まず、すべての生徒が防災を自分事として捉えられるよう、地域で起こり得る災害や身近な生活空間を題材にしたイラストや写真を活用し、現実感のある学習内容を構成した。その上で、外国にルーツのある生徒の理解を促進するため、複数の支援方を講じた。具体的には、説明を言語情報だけに依存せず、映像教材を活用し、やさしい日本語やイラスト、写真等視覚的情報を多く含む低年齢向けの番組を選択した。また、活動に使用する資料やカードには文字情報に加えてイラストを併用し、視覚的補助を強化した。さらに、読み書きに困難を抱える生徒であっても、仲間との対話を通じて学習を進めやすいよう、協働的な班活動を基盤とした構成を採用した。

②指導計画(全2時間)

第1次 大雨から身を守るための備え (7月14日実施)

大雨の時に自分の身を守るために「今」できる備えは何か考える。

第2次 地震から身を守るための備え (9月1日実施)

地震の時に自分の身を守るためにできることは何か考える。

③実際の指導

第1次 大雨から身を守るための備え (7月14日実施)

○ねらい

- ・大雨による災害に対して自分事として正しい危機感を持ち、自分の身を守る方法や備えを考え、理解する。
- ・災害に対する危険や備えについて、授業で学んだことをもとに家族に話したり、実際に備えたりする。

○指導過程

学習活動	指導上の留意点
① 2024年8月31日の大雨について、当時の写真を提示し、振り返る。	・水害に対するトラウマがある生徒がいないか事前に確認しておく。
② めあてを提示する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">大雨の時に自分の身を守るために「今」できる備えは何か？</div>	
③ 番組を視聴する。 NHK for School 「よろしく!ファンファン」 #6自然災害とともに生きる-水害-	・「水害による被害」と、「命を守るための行動」について、番組内の大切だと思った所を記録させる。
④ 「水害による被害」と、「命を守るための行動」について、全体で確認する。	・確認後、命を守るための行動はこれだけ?と問い、次の活動に繋げる。
⑤ 班で「キキカード」に取り組む。 ・どのようなキキが予想できるか? ・キキを回避するために、今できることは?	・キキカードは事実をもとに自作。 ・「自分がこの立場だったら…」と自分事として考えさせる。
⑥ 各班の「キキ」を全体で共有する。	・発表をし、間違った認識をしている場合のみ授業者が訂正する。
⑦ 個人で振り返りをする。	・この授業で学んだことや気づいたこと、今から自分がする行動について、200文字以上記入させる。
⑧ 宿題(防災ノートのワークシート②、④ ⁷)について説明する。	・感じた危機や備えの必要性を、家族に話し行動に移すよう伝える。

○実際の様子

- ① 2024年8月31日の大雨について問いかけた際、当初は多くの生徒が状況
② を思い出せず、反応は薄かった。しかし、当時の様子を撮影した写真を提示すると、ほとんどの生徒が記憶を呼び起こし、「家の横の川が溢れそうだった」「道路が見えなかった」等、具体的な体験を語る姿が見られた。



日本語の理解が困難な生徒は、スクリーンに映された資料を、自分の端末で読み込んでリアルタイムで翻訳し、内容の理解につなげていた。

これからの季節に大雨が増えることを踏まえ、本時の課題として「大雨から身を守るために今できることを考える」ことを提示した。

⁷ ワークシート②は「備蓄品の種類と量、場所を確認する」、ワークシート④は「家族の避難先を知って、連絡を取る」について、家族と確認する課題が記されている。

- ③ NHK for School「よろしく!ファンファン#6 自然災害とともに生きる-水害-」を全体で視聴し、「水害による被害」と「命を守るための行動」について、番組内で大切だと思った箇所を記録する活動を行った。



本来は、教室のスクリーンに映す映像と同じものを各生徒の端末に画面配信しながら再生し、生徒は画面収録機能を用いて番組内で重要だと思った場面を残す予定だった。しかし、配信がうまくいかず、記録方法は多様になった。具体的には、メモに残す、スクリーンを自分の端末で撮影する等、生徒がそれぞれ工夫して記録を行っていた。

- ④ 「水害による被害」と「命を守るための行動」について、どのようなものがあつたか全体で確認を行った。共有の方法はクラスによって異なり、ロイロノートで共有する、口頭で発表する、挙手制で確認する等、複数の手段が用いられた。「水害による被害」については、集中豪雨の様子、堤防の決壊、浸水、民家の孤立等、番組内で実際の写真で示された被害が印象に残った生徒が多かった。



(↑水害による被害について印象に残った場面を一人一枚提出した状況)

一方、命を守るための行動としては、早めの避難、情報収集、マイ・タイムライン⁸の作成、備えのポイント等、図や文字による説明の場面が挙げられた。



(↑命を守るための行動について印象に残った場面一人一枚提出した状況)

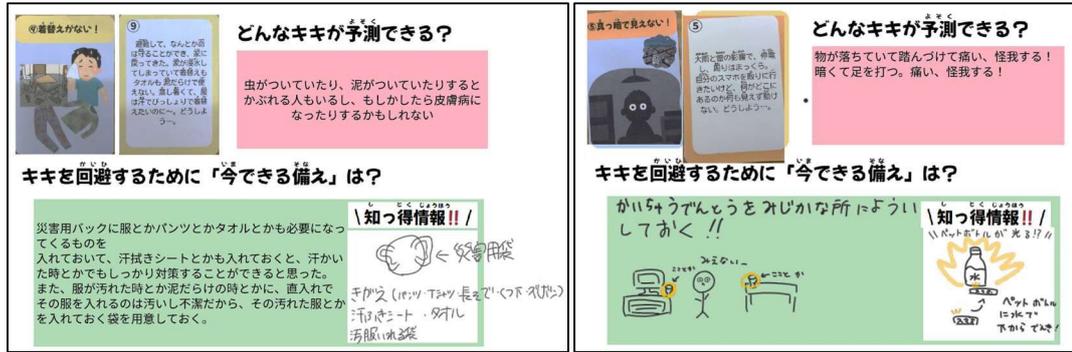
⁸ マイ・タイムライン: 台風や大雨による風水害に備えて、住民一人ひとりが「いつ」「誰が」「何をするか」を時系列で整理した個人の避難行動計画。ハザードマップ等を基に、適切な避難のタイミングと行動を事前に考えるための防災ツール。

⑤ キキカード(詳細は巻末資料を参照。)を用いて、危険と備えについて班員と協力しながら考える活動に取り組んだ。キキカードとは、事実をもとに「どうしよう、大変だ」という状況を 15 パターン考え、オリジナルで作成したカードである。外国にルーツのある生徒にも伝わるように、文字とイラストを併用してキキカードを作成した。



活動では、「どのようなキキが予想できるか」「今できる備えは何か」について、自分がカードの状況に置かれたらどうするか自分事として考えさせ、班内で活発に意見交換する姿が見られた。さらに、備えるために知っておくとよい情報を調べ、班ごとに一つのワークシートにまとめて記入し、協働的に学びを深めていた。

⑥ 各班の「キキ」を全体で共有する。
発表は各班の代表が発表したり、各班が作成したカードをクラス全体で共有して各個人でみたり、共有の方法は様々であった。



(↑班で作成したカードの一部)

⑦ 個人で振り返りを行った。学びを自分の生活に結びつけ、防災意識を高めることをねらいとして、この授業で学んだことや気づいたこと、さらに実際に行動しようと思ったことを、具体的に記入させた。



- ⑧ 授業の最後に、宿題の防災ノートのワークシート(②備蓄品の種類と量・場所を確認する、④家族の避難先を知って連絡を取る)について説明した。宿題は、学びを家庭に広げ、防災意識を家族と共有することをねらいとし、今日の活動で感じた「キキ」や備えの大切さを家族に伝えてほしいことを強調した。



夏休みの宿題の一つとして、防災ノートのワークシートに取り組むよう説明した。特に、可能な限り家庭の備蓄品の写真を添付し、種類・量・保管場所を確認することを求めた。

第2時 地震から身を守るための備え (9月1日実施)

○ねらい

- ・地震による災害に対して自分事として正しい危機感を持ち、自分の身を守る方法や備えを考え、理解する。
- ・災害に対する危険や備えについて、授業で学んだことをもとに家族に話したり、実際に備えたりする。

○指導過程

学習活動	指導上の留意点
① 前回の授業を受けて、夏休み中に「備えること」はできたか確認する。	・夏休みの宿題(ワークシート)に触れる。
② めあてを提示する。	・提示する前に、備えが必要なのは前回学んだ大雨だけかと問う。
地震の時に自分の身を守るためにできることは何か？	
③ 南海トラフ巨大地震の被害想定 CG 映像を視聴する。(3分3秒)	・激しい揺れや津波の場面でどうしても見たくない場合は、顔を伏せても良いことを事前に伝える。
④ 番組視聴から減災の方法を確認する。 NHK for School 「キキとカンリ」 地しんのときの行動	・災害を防ぐことはできないが、災害を減らすこと(減災)はできることを伝える。
⑤ 番組視聴で確認した、減災の方法をクラス全体で共有する。	・3つのない(落ちてこない、倒れてこない、移動してこない)、サルのポーズ、ダンゴムシのポーズ、家具の固定について確認する。

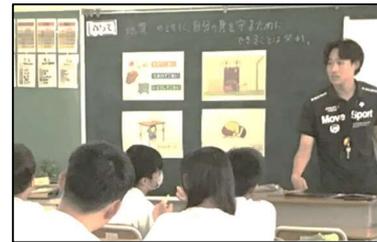
⑥ イラスト内における、地震が起きた時の危険を、ペアで見つける。	・家のイラストのカードを配付し、危険などところに印をつける。
⑦ 危険から身を守る方法を、班で考える。	・イラスト内の5人のうち、1人に視点を絞って考える。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>i この人に迫る危険は何？</p> <p>ii 危険から身を守るにはどうしたら良い？</p> <p>iii 危険を減らすために、起こる前にできることは？</p> </div>	
⑧ 個人で振り返りをする。	・気づいたこと、仲間の意見から発見したこと、実際に行動に移すことを200文字以上で記入する。

○実際の様子

① 授業の冒頭で、前回の学習内容を確認したところ、学習内容が定着していない生徒も一定数見られた。しかし、当日取り組んだワークシートやカードを提示すると、内容を思い出す様子が見られた。	
② 前は「大雨から身を守るために今できること」を考え、備えの大切さを学んでいたことを確認した上で、本時のめあては「地震から身を守るためにできることを考える」であることを伝えた。	
③ 内閣府が作成した「南海トラフ巨大地震編シミュレーション編(3分3秒)」を一斉に視聴した。緊迫感のある映像に、ほぼ全員の生徒が顔を上げ、集中して見入っていた。耳をふさぎ、顔を伏せる生徒は、各クラスで一人いるかないか程度であった。この映像は、生徒が東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)の発生時にはまだ生まれていなかったため、巨大地震に関するイメージを持ちにくい状況を踏まえ、具体的な映像を通してイメージを形成し、真剣に「自分にできること」を考えさせることを目的として視聴した。 映像視聴後、南海トラフ巨大地震は必ず起こるとされており、災害そのものを防ぐことはできないが、事前の備え次第で被害を減らすことができることを確認した。減災をめざし、授業では備えの大切さや、災害を減らすためにできることについて学ぶことを全体で共有した。	
④ 番組「NHK for School キキとカンリ 地しんのときの行動」の一部(説明部分)を一斉に視聴し、地震の時に身を守るためのポイントを学んだ。	

- ⑤ 番組視聴後、地震の際に身を守るためのポイントについて全体で確認した。「番組でどんなことが述べられていたか」「3つのポイントは何か」を問いかけながら、生徒と一緒に整理した。

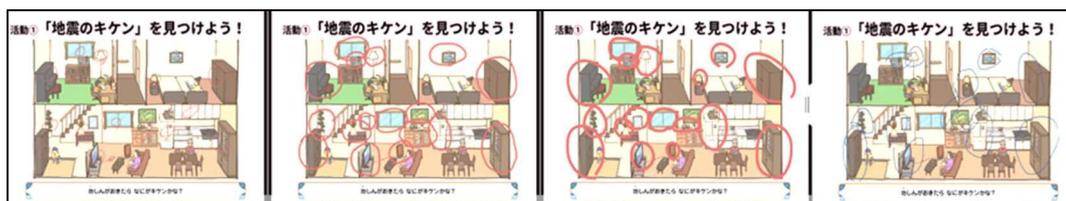
確認した内容は、まず「3つのない」として、落ちてこない、倒れてこない、移動してこないという安全な環境を整えること、次に、大きな危険から身を守るために、危険な場所を避けることや、身を守る姿勢としてサルのポーズやダンゴムシのポーズを取ること、そして、事前に対策をしておくこととして家具の固定等が挙げられた。クラスによっては、実際にサルのポーズやダンゴムシのポーズを行いながら確認する場面が見られた。



- ⑥ 1人1台端末を用いて、イラストに「3つのない」をもとに、家の中の考えられる危険を書き込む活動を行った。生徒は、番組で示されていた色分けと同じ色を使って危険を分類しながら書き込む姿や、家具がどのように動くかを文字で具体的に記入する姿が見られた。



イラストに○印をつける活動は、外国にルーツのある生徒にとっても取り組みやすかったのか、提出できている生徒が比較的多かった。



- ⑦ 前の活動で取り組んだイラストを、人や部屋ごとに細分化し、3つのスモールステップに分けて班で話し合いながら、地震から身を守る方法について考えた。

STEP1:地震発生!この人に迫る危険は何か?

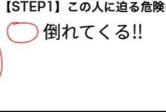
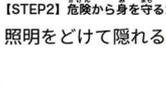
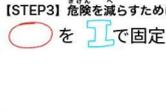
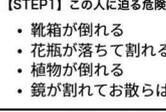
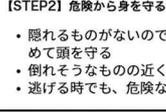
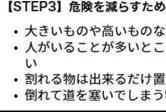
STEP2:地震発生!危険から身を守るためにはどうしたらよいか?

STEP3:地震発生前にできた減災は?

(危険を減らすためにあらかじめしておくべき対策は?)

班ごとに、手書きで書き込むグループや、端末で文字を打ち込むグループ等様々な方法で取り組んでいた。中には、色分けをしてイラストに○印を付け、文字での

説明とリンクさせて記入する等、視覚的に整理する工夫をしている班があった。最後に、各班で記入したカードを発表し、全体で共有することで、危険回避の方法や事前の備えについて理解を深める姿が見られた。

<p>B お母さん</p>  <p>[STEP1] この人に迫る危険は何？ ○ 倒れてくる!!</p>  <p>[STEP2] 危険から身を守るためにはどうしたら良い？ 照明をどけて隠れる 🛋️ 🧸</p>  <p>[STEP3] 危険を減らすために起こる前にできることは？ ○ を I で固定する。</p>	<p>C お兄さん</p>  <p>[STEP1] 地震発生！この人に迫る危険は何？ 左の棚が倒れてくる。 花瓶が割れる。 鏡が割れる。 棚みだいのが倒れてくる。</p>  <p>[STEP2] 地震発生！危険から身を守るためにはどうしたら良い？ 右の方に行く。 しゃがみ伏せる。 外に出る。</p>  <p>[STEP3] 地震発生前にできた減災は？ (危険を減らすために、あらかじめしておくべき対策は？) 棚などを突っ張り棒で固定する。 花瓶をガラス→プラスチックなどの割れにくい物に変える。</p>
<p>C お兄さん</p>  <p>[STEP1] この人に迫る危険は何？ 靴箱が倒れる 花瓶が落ちて割れる 植物が倒れる 鏡が割れてお散らばる</p>  <p>[STEP2] 危険から身を守るためにはどうしたら良い？ 隠れるものがないので、靴箱から離れて体を丸めて頭を守る 倒れそうなものの近くに行かない 逃げる時でも、危険なもののある方に行かない</p>  <p>[STEP3] 危険を減らすために起こる前にできることは？ 大きいものや高いものなどの倒れる物は固定する 人がいることが多いところは、危険なものを置かない 倒れる物は出来るだけ置かない 倒れて道を塞いでしまう物は別の場所におく</p>	<p>D お父さん</p>  <p>[STEP1] 地震発生！この人に迫る危険は何？ テレビが倒れてくる！ 窓ガラスが割れる！ ストーブが燃えて家事につながる！ 花瓶や絵が落ちてくる！</p>  <p>[STEP2] 地震発生！危険から身を守るためにはどうしたら良い？ すぐにいるところにある机に入る！ 家事になる前にフードを抜く！ ストーブはなくエアコンを使う！</p>  <p>[STEP3] 地震発生前にできた減災は？ (危険を減らすために、あらかじめしておくべき対策は？) 花瓶をガラスからプラスチックにかえる！ 絵が外れないようにしっかり固定する！</p>



日本語で表現することが難しい生徒は、翻訳アプリを用いながら英語で自分の考えを入力し、日本語に翻訳して取り組んでいた。班活動の際も、翻訳アプリを活用して不足する言語を補いながら、自分の考えを他者に伝える姿が見られた。

⑧ 授業の最後に、地震のときにどんな危険があるか、危険を減らすためにできることは何か等、気づいたことや発見したこと、必要だと思ったことを振り返り用紙に記入した。

3つのないお母さんを見て、当てるのは、固
定したり、変えたり、物を置かないなど、工夫
して地震の対策をしようと思いましたが、机の
下に隠れたら、家具から離れた場所でダン
ゴムマットを敷いて身をまもろうと思いま
した。ただ、お母さんや家具から離れるだけじゃ
なく、サルのポーズで机を両手で固定した
家具がたおれたり、移動してこの場所でダン
ゴムマットを敷いて頭などの身を守るよう
に行動をしていこうと思いました。ネジなど
で固定したらいいんじゃないかな。

3つのないお母さんを見て、当てるのは、固
定したり、変えたり、物を置かないなど、工夫
して地震の対策をしようと思いましたが、机の
下に隠れたら、家具から離れた場所でダン
ゴムマットを敷いて身をまもろうと思いま
した。ただ、お母さんや家具から離れるだけじゃ
なく、サルのポーズで机を両手で固定した
家具がたおれたり、移動してこの場所でダン
ゴムマットを敷いて頭などの身を守るよう
に行動をしていこうと思いました。ネジなど
で固定したらいいんじゃないかな。

④検討するための調査について

本実践では、授業前後における生徒の防災に関する意識および行動力の変容を把握するため、6つの育成したい資質・能力に基づいて質問項目を作成し(表1)、四件法⁹によるアンケート調査を実施した。質問内容は以下の通りである。

表1 育成したい資質・能力に基づいて作成した質問項目一覧

	育成したい資質・能力				
	防災に関する知識	危険の予測	自助に向けた行動	地域の一人としての行動	実践的な防災意識 家庭への発信力
1 地震や津波が起きるしくみを知っている。	○				
2 大雨による災害に備えるためにどんな情報を収集するのか知っている。	○	○			
3 避難に関する警戒レベルの意味を知っている。	○				
4 災害が起きたときにとるべき行動を知っている。	○				
5 自分が住んでいる地域は自然災害がいつでもやってくる地域だ。	○	○			
6 自然災害が起きたときに、自分は怪我をするかもしれない。		○			
7 自然災害が起きたときに、自分は安全に避難できる。			○		
8 自然災害が起こる前に、家族で話し合っって約束事を決めておくべきだ。			○		○
9 自然災害から被害を減らす学習内容を家族に伝えたい。					○
10 自然災害の被害を減らすために自分でできることがある。			○		
11 避難訓練の時に、とるべき行動を自分で考えて取り組んでいる。			○	○	
12 地域の人たちと協力して避難所の運営に関わりたい。				○	
13 自分も地域防災の一員であるという自覚がある。				○	
14 災害時の避難所で自分が何をしたら役に立てるかを考えたことがある。				○	○
15 日頃の生活の中で「もし災害が起きたら」と考えることがある。				○	

上記の質問に加え、「家族と防災について話し合ったか」「自分が実際に行動したか」について選択肢形式で調査し、学習が家庭や日常生活における行動の変化に及ぼす影響を検討した。

⁹ 四件法:アンケート回答形式の一つで、本実践では、「そう思う」「どちらかというと思う」「どちらかというと思わない」「そう思わない」の4段階で調査した。

第1学年の全生徒を対象に、①授業前、②7月の第1回授業後、③9月の第2回授業後の、計3回の調査を実施した。すべての調査に回答した167件（そのうち外国にルーツのある生徒は19件）のデータを抽出し、学習を通じた意識や行動の変化を可視化した。

調査結果を踏まえ、「言語的な課題に左右されず学ぶことができたか」「判断する場面を設定した授業による学習効果が認められるか」を、授業の目標の達成度を評価することで検討していく。本実践は下記の2つを目標とし授業を設計した。

- ・災害に対して自分事として正しい危機感をもち、身を守る方法や備えを考え理解する。
- ・授業で学んだことをもとに家族に話したり、実際に備えたりする。

これらの授業の目標の達成度を評価するにあたって、「i 危機意識を高められるかどうか」「ii 主体的な行動につながったかどうか」の2つの観点で整理していく。

結果の分析においては、まず全体を対象に設計した授業の学習効果を検証した上で、外国にルーツのある生徒とその他の生徒の結果を比較し、外国にルーツのある生徒においても学習効果が認められるかを検討した。

⑤分析の結果と考察

〈i 危機意識を高められるかどうか〉

危機意識に関する2項目、Q5「自分が住んでいる地域は自然災害がいつでもやってくる地域だ」、Q6「自然災害が起きたときに自分は怪我をするかもしれない」について、四件法の調査対象者全員の回答が事前、7月、9月でどのように推移したかを比較した結果を以下に示す。(図1、図2)

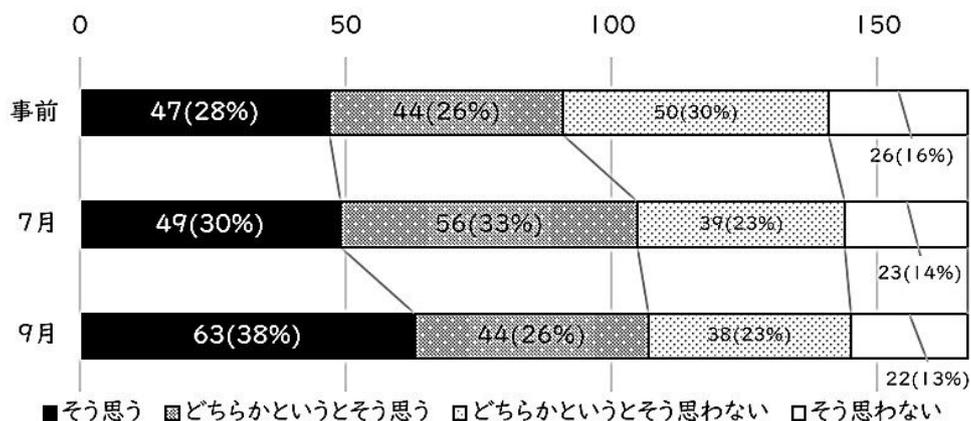


図1 Q5「自分が住んでいる地域は自然災害がいつでもやってくる地域だ」の推移

Q5「自分が住んでいる地域は自然災害がいつでもやってくる地域だ」では、肯定的な回答（そう思う、どちらかというと思う）が91人（54.5%）→107人（64.1%）へ増加した。さらに、肯定的な回答の内訳として「どちらかというと思う」から「そう思う」に移り変わったことが確認され、危機意識の高まりが認められた。

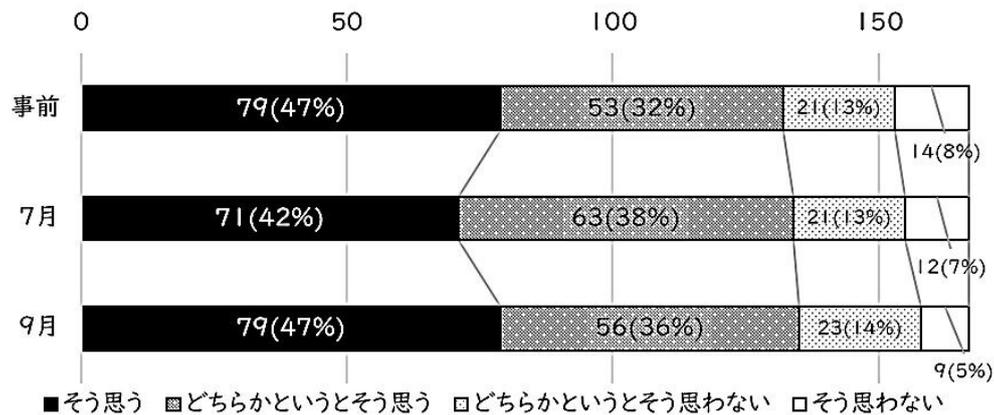


図 2 Q6「自然災害が起きたときに自分は怪我をするかもしれない」の推移

Q6「自然災害が起きたときに、自分は怪我をするかもしれない」では、回答分布に大きな変化はみられなかった。これはもともと肯定的な回答が132人(79.0%)と高かったためだと考えられる。

A中学校周辺は、湾や山地から離れており、津波・土砂災害のリスクが低い。このような地理的条件が、学習前における「自然災害は身近に起こる可能性がある」という危機意識の低さに影響していると考えられる。今回の授業では、大雨による浸水や地震の揺れによる被害等、場所を問わず誰にでも起こりうる災害に焦点を当てた結果、危機意識は一定の向上が見られた。

次に、外国にルーツのある生徒とその他の生徒の結果を比較する。危機意識に関する2つの項目について、「そう思う=4点」「どちらかというと思う=3点」「どちらかというと思わない=2点」「そう思わない=1点」と得点化し、全3回の調査の平均得点の推移を比較した。分析対象は、外国にルーツのある生徒19人、その他の生徒148人と、対象人数に差があるため、平均得点による比較を用いた。結果を以下に示す。(図3、図4)

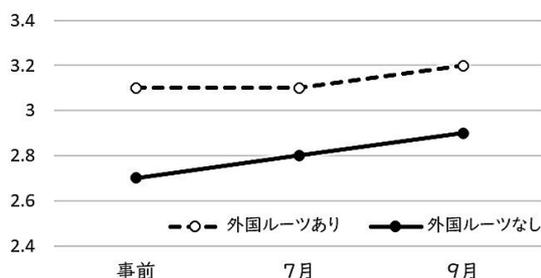


図 3 Q5「自分が住んでいる地域は自然災害がいつでもやってくる地域だ」の推移 (外国ルーツあり・なしの違い)

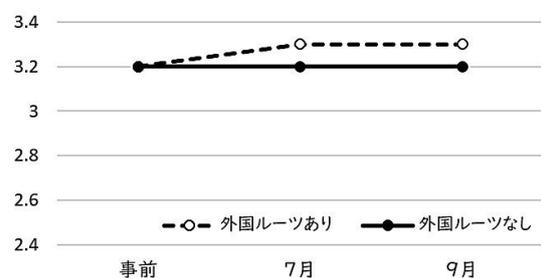


図 4 Q6「自然災害が起きたときに自分は怪我をするかもしれない」の推移 (外国ルーツあり・なしの違い)

Q5「自分が住んでいる地域は自然災害がいつでもやってくる地域だ」では、外国にルーツのある生徒の得点が「事前(3.1)→7月(3.1)→9月(3.2)」、その他の生徒の得点が「事前(2.7)→7月(2.8)→9月(2.9)」と、両者とも少しずつ上昇していることが確認された。外国にルーツのある生徒と、その他の生徒との差は「事前(0.4)→7月(0.3)→9月(0.3)」とわずかに縮小し、学習後には両者の認識が近づく傾向が見られた。

Q6「自然災害が起きたときに、自分は怪我をするかもしれない」では、大きな変化はみられなかった。平均得点は、外国にルーツのある生徒が「事前(3.2)→7月(3.3)→9月(3.3)」と高い水準でやや増加し、その他の生徒は「事前(3.2)→7月(3.2)→9月(3.2)」とあまり変化がみられなかった。

Q5・Q6ともに、外国にルーツのある生徒の平均得点がやや高い傾向を示した。この傾向は、Q5・Q6に限らず、全15項目で一貫して見られた。調査は日本語と英語の両方で表記して実施しており、調査内容の理解不足が関係している可能性は低い。この傾向の理由を明らかにするには、インタビュー調査等さらに詳細な検証が必要だが、少なくとも本実践の教材設計は、言語理解の課題に左右されず学習効果が確認されたことを示唆する。

具体的には、説明を言語情報だけに依存せず、①映像教材の活用、②やさしい日本語、イラスト、写真等視覚的情報を多く含む低年齢向けの番組の活用、③イラストを併用した資料やカード、④協働的な班活動を基盤とした対話による相互支援等、複数の工夫が、読み書きに困難を抱える外国にルーツのある生徒に対しても有効に機能したと考えられる。

〈ii 主体的な行動につながったかどうか〉

学習を終えた9月の調査において、全15項目の平均得点を比較した。その結果、全15項目の平均得点(3.1)に対し、Q8「自然災害から被害を減らす学習内容を家族に伝えたい」(3.7)、Q9「自然災害が起こる前に、家族で話し合っって約束事を決めておくべきだ」(3.3)の平均得点が、他の項目に比べて高いことが確認された。Q8・Q9は、家庭内での対話や事前の取り決めに関する調査であり、学習後にこれらへの同意の強さが高い傾向が示された。

次に、防災・減災のために「家族と話したこと」や、「実際に行動したこと」に関する、選択肢式の行動調査について、以下に学習前と、2回の学習後の件数の推移を比較した結果を示す。

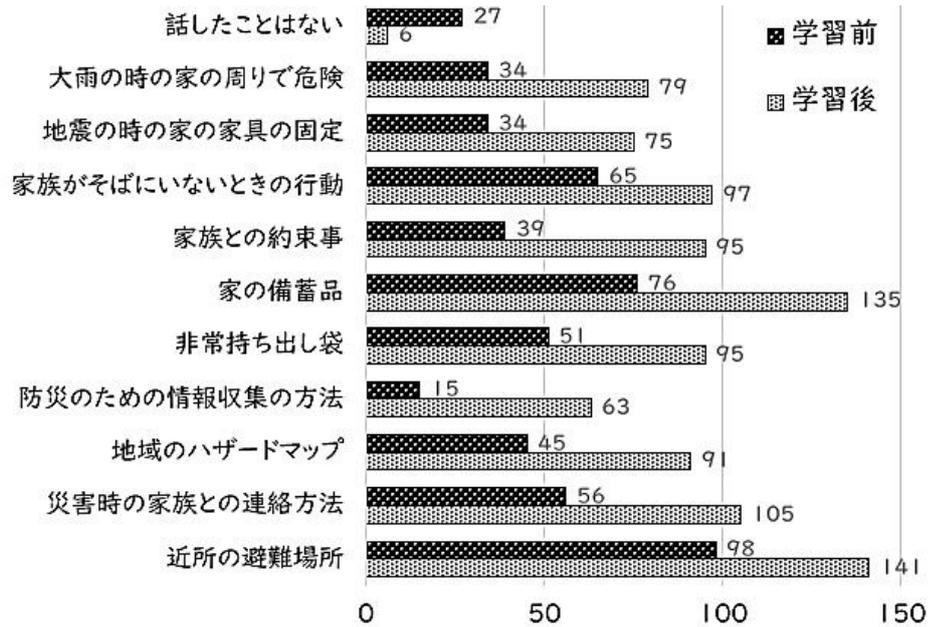


図 5 学習前後における「家族と話したこと」に関する選択肢調査の結果の推移

「家族と話したこと」では、「話したことはない」を選択した生徒が減少し、他の項目はすべて増加した。特に増加件数が多かったのは、「家の備蓄品」(+59件)が最も多く、次いで「家族との約束事」(+56件)、「災害時の家族との連絡方法」(+49件)であった。

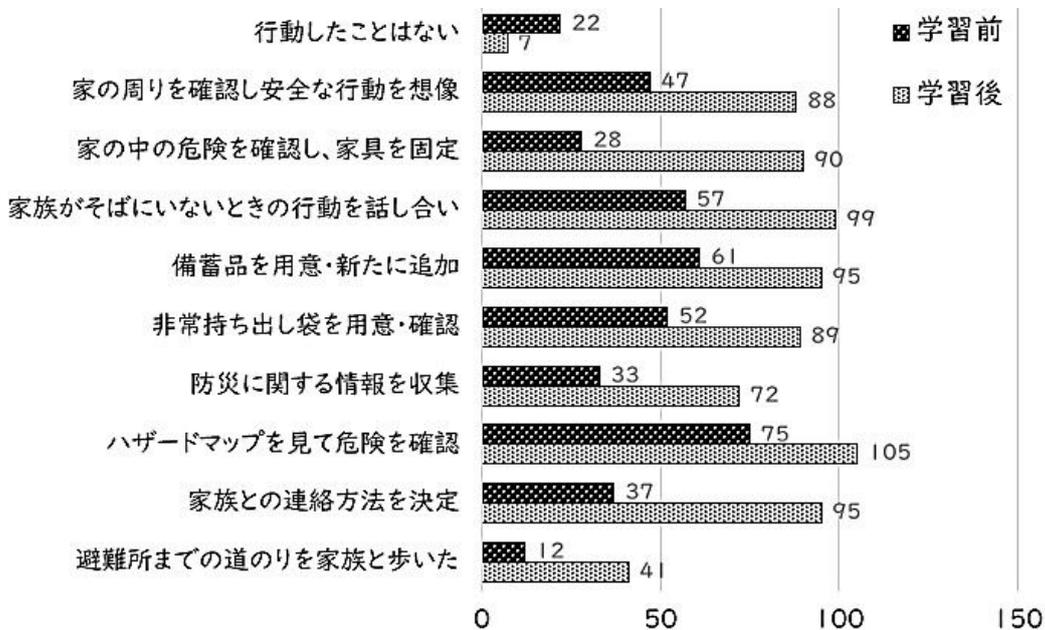


図 6 学習前後における「実際に行動したこと」に関する選択肢調査の結果の推移

「実際にした行動」でも、「行動したことはない」を選択した生徒が減少し、各項目は概ね増加した。なかでも、「家の中の危険を確認し、家具を固定したこと」(+62件)が最も

多く、次いで「家族との連絡方法を決定」(+58件)、「家族がそばにいないときの行動を話し合い」(+42件)であった。これらの結果より、学習をきっかけとして、家族との対話から、具体的な備えの行動へとつながったことが確認できる。

本実践は、大雨による災害や巨大地震による災害に対して、発生前にできる(今できる)備えについて、「備えがない場合に、何が起こりうるか」「そうならないために、どんな備えが必要か」を、図上のロールプレイ型の学習を班の対話によって進めながら、実施した。

結果の傾向は、学習が家庭での準備行動に結びついたことを示しており、「授業での学習が主体的な行動につながった」ことが明らかになった。一方で、会話や行動をしていない生徒は減少したが、まだ一定数いる。継続的な防災学習による危機意識の持続や、家庭学習の課題の出し方の工夫によって、防災・減災に関する行動の定着をさらに高められるだろう。

以上の結果から、「判断する場面を設定した授業による学習効果」が認められ、授業設計の工夫により、言語的な課題にも左右されず学ぶことができたことが明らかになった。

2 【検証2】A中学校全学年における防災学習

①実践に取り組むにあたって

本実践は、研究の目的である「災害時に児童・生徒が主体的に判断し行動する力を育成する防災教育のあり方」を検証する過程で実施したものである。外国にルーツのある生徒を含め、すべての生徒が、地域の一員として災害発生時に避難所運営に参画する意識を持つことを目的とした授業設計と教材作成の工夫を行った。

A中学校では、避難所に関する学習に取り組んだ経験がないため、これまで避難所運営を身近に感じていなかった生徒が、自分も避難所運営に関わることができると思うようになることをめざした。

松阪市防災対策課による防災講話で災害時の被害状況や、避難所の運営実態や生活の様子を具体的に学ぶ機会を設けたのち、避難所運営の第一歩として四コマのシナリオ学習を取り入れ、実際に自分の身に起こりうる身近な課題をもとに、生徒が主体的に判断し行動する力を育成する授業デザインを検討し、その効果を検証した。

また、外国にルーツのある生徒の理解を促進するため、複数の支援の工夫を取り入れた。具体的には、説明を言語情報のみ依存せず、活動で使用する資料やカードにイラストを併用して視覚的な支援を取り入れた。さらに、読み書きに困難を抱える生徒であっても、仲間との対話を通じて学習を進めやすいよう、協働的な班活動によって学習を進めていく授業設計をした。

②指導計画（全2時間）

第1次 松阪市防災対策課による防災講話（11月13日5限目実施）

「能登半島地震災害派遣を終えて」と題し、実際の経験談から学ぶ。

第2次 避難所について知り、課題を解決しよう（11月13日6限目実施）

避難所生活をイメージし、過去の災害事例に触れながら、四コマのシナリオ学習で起きた課題の解決策を、班活動で考えた。

③実際の指導

第1次 松阪市防災対策課による防災講話（11月13日5限目実施）

○ねらい

- ・能登半島地震の災害派遣における避難所運営の経験談を通して、災害時の被害状況、避難所の運営実態、生活の様子を具体的に知る。

○実際の様子

「自分の命は自分で守る。助けられる人から助ける人に。」をテーマに、能登半島地震の災害派遣の経験から、被害の状況、避難所運営の実際、生活の様子について学んだ。地震の揺れの様子が分かる当時のドライブレコーダー映像や、実際の被害を捉えた写真（道路、家屋、マンホール、海岸等）を用いる等、視覚的補助が効果的に用いられた。また、避難所運営には中学生の力が必要であること、役割分担をしながら被災者自身が自主的に運営していくことについて、事例を交えての説明があった。



第2次 避難所について知り、課題を解決しよう（11月13日6限目実施）

○ねらい

- ・講話の内容をもとに、避難所生活における課題を解決する方法を考え、避難所運営で自分にできることを考えるきっかけづくりや、事前の備えにつなげる。

○指導過程

学習活動	指導上の留意点
① 講話の内容を振り返り、めあてを提示する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">避難所生活で大切なことは何か？</div>	・講話の内容をもとに、避難所生活について考える学習を進める。
② シチュエーションの状況設定を説明し、避難所生活を想像する。	・四コマのシナリオ教材 ¹⁰ をもとに、避難所生活における課題の解決策を考えていく。
<p>厳しい残暑が続くある日の午後2時。これまで経験したことのない強い揺れが襲ってきた。強い揺れは3分くらい続いたのだろうか。永遠に続くのではないかと思うほど長かった。それはまさか自分が体験すると思っていなかった南海トラフ巨大地震。松阪市は震度6強の揺れに見舞われ、電気や冷房はつかず、スマホも繋がらない。A中学校で避難所が立ち上がることになった。自分は何をするべきなのか。学校を一番知っている自分たちこそが、避難所で運営に携わるべきだ！</p>	

¹⁰ 本実践の授業デザインは、慶応大学 SFC 防災社会デザイン研究室の4コマ漫画教材を参考にした。

<p>③ 四コマの内容を説明する。 1、2コマ目：災害時に起こりうる状況 3コマ目：そこで起きた正解のない課題 4コマ目：課題を解決するために避難者を納得させるセリフを考える</p>	<p>・3種類の四コマのシナリオ教材（「A 物資不足」「B 在宅避難者の当番」「C スペース確保」）の中から、各学級に合うものを選択する。</p>
<p>④ 課題にどう対応するか、2 択から選ぶ。 A: 支援物資を配る or 配らない B: 在宅避難者も掃除する or しない C: スペースを詰める or 詰めない</p>	<p>・2 択のどちらが正解というわけではない。 ・他者と相談せず個人で決める。</p>
<p>⑤ 事例カードを紹介する。</p>	<p>・事例カードは、過去の災害の実体験をまとめたもので、各シナリオに対し賛成・反対の両方のエピソードを記している。</p>
<p>⑥ 事例カードの内容も踏まえ、課題の解決策と、避難者を納得させるセリフを、班で話し合う。</p>	<p>・解決策を考える中で、状況をもとに納得解を模索し、災害時の場面を自分事として具体的にイメージすることを目的とする。</p>
<p>⑦ 各班で考えたセリフを発表（共有）する。</p>	<p>・正しい意見や素晴らしいセリフを競うことが目的ではない。</p>
<p>⑧ 取り組んだシナリオ教材に沿った役立つ情報や自分にできることを知り、最後に学習を振り返る。</p>	<p>・正解がない課題であるため、過去の災害での複数の解決策に触れる。</p>

○実際の様子

① 前時の講話で何が語られたかを学級・班で振り返った。各学級では、①道路や家屋の損傷等の具体的な被害、②印象に残った写真やドライブレコーダー映像、③避難所の運営や生活の様子について意見が交わされた。特に、映像や写真等の視覚資料を記憶の手がかりとした発言が多かった。

② イラストを提示して、想定する状況とこれから行う活動を説明した。

9月のはじめの
ある暑い日



経験したことがない
巨大地震が発生

電気、冷房、スマホなどは使えない



設定は「9月のはじめの暑い日、経験したことがない巨大地震が発生」であり、電気・冷房・スマホ・固定電話・水洗トイレ・水道が使えないという条件を示した。

③ 四コマを提示しながら、各コマのねらいも踏まえて説明した。1・2コマ目では、災害時に起こりうる状況を把握し、3コマ目ではその状況で正解のない課題が発生すること、4コマ目では課題を解決し避難者を納得させるためのセリフを考えて伝えることを確認した。

四コマのシナリオ教材は、A～Cの3種類を用意し、各学級に合ったものを担任が選択した。第1学年から第3学年まで全24学級のうち、23学級がAを選択し、1学級がBを選択した。

〈A 足りない支援物資の配布について〉



〈B 在宅避難者のトイレ掃除について〉



〈C 避難スペースの確保について〉



④ 班での話し合いに入る前に、課題への対応について、正解が一つに定まらないことを確認した上で、他者と相談せず個人で二択から選んだ。学級によっては意見が二分されたところもあれば、同じ選択が多数を占めたところもあった。



意見を色分けして提示し、結果を視覚的に把握しやすいようにした。

A: 支援物資を配る(ピンク) / 配らないで置く(水色)

B: 在宅避難者も掃除をするべき(ピンク) / 掃除しなくていい(水色)

C: スペースを詰めるべき(ピンク) / 詰めなくてもいい(水色)

支援物資を配る 配らないで置く 10/12/21 14:20							
在宅避難者も掃除をするべき 掃除しなくていい 10/12/21 14:20							
スペースを詰めるべき 詰めなくてもいい 10/12/21 14:20							

⑤ 過去の災害の実体験をもとにした事例カードを紹介した。四コマの内容に沿って、各課題について賛成と反対の両方の意見を事例で示し、次に班で解決策を考える際のスモールステップとした。学習の中で、避難所の実際を具体的に知り、イメージすることができた。

	<p><体験談1> みそ汁が不足で大騒ぎ</p> <p>地域の炊き出しでは、避難所の全員に行き渡るように400人分のみそ汁を作りました。第一にこども、次に高齢者、最後に大人という優先順位が自然にできあがったときは、「やはり日本って、すごいなあ」と感じました。ところが、車中泊していた人たちを救えなかったのです。「おれの分はないのか!」と怒鳴られるのはすごく切なかつた。</p> <p>出典*内閣府『1日前プロジェクト』</p>	<p><体験談4> 平時の不平等は、有事の平等?</p> <p>被災地で僕が感じたのは、物資を持って行っても全員が集まらないう配らないという平等の名のもとに必要な物を配らないという現実でした。でも、千葉ちゃんたちは『あるものみんな持って行って』ということも最初からやっていた。ある意味、不平等をやっていたかもしれないけど、その不平等が、有事の際には平等だったりするんです。</p> <p>出典*頓所直人『笑う、避難所』(集英社、2012)</p>
	<p><体験談2> 支援物資はみんなの見えるところに</p> <p>「あります」と「ありません」を避難者全員に知らせるために、届いた支援物資はすべて見えるところに重ねておきました。</p>	<p><体験談5> 長持ちする食材はとっておく</p> <p>避難所生活が始まった後は「支援がいつまで続くかわからない」ということで、長持ちする食材をできるだけ使わないようにしていました。結果、食料の内容が偏りました。</p>

⑥ 課題の解決策と、4コマ目の避難者を納得させるセリフを、班で話し合い考えた。班によっては、意見が分かれる場面もあり、互いの納得解を探る姿が見られた。

	<p><セリフ> 😊 (いーね)</p> <p>この支援物資は250人分しかないから1人分を4分の1にして全員に行き渡らせるようにしましょう!</p> <p>必要じゃない人は必要な人にあげて助け合おう!</p> <p>理由</p> <p>必要じゃない人にあげるのはその分必要な人にあげたほうが送られた物資が勿体無し他の人が助かるから。 みんなにあげずに一部の人だけにあげたりみんなにあげずにいると不平等だしみんな助からないから。</p>
---	--

⑦ 各班で作成した避難者を納得させるセリフを学級全体で共有した。発表に際しては、正しい意見が一つに定まるわけではないこと、素晴らしいセリフを競うことが目的ではないことを確認した。学級によっては、避難所運営者と避難者に分かれてロールプレイをしながら発表する形式を採用していた。

⑧ 課題には正解が一つに定まらないからこそ、その場の状況に応じて避難者自身が納得解を模索していくこと確認した。学習が消化不良で終わらないよう、取り組んだ四コマに沿って過去の災害で実際に用いられた解決策や役立つ情報、自分にできることを紹介した。紹介した内容には松阪市防災対策課の災害派遣での経験談も含め、前時の講話とのつながりを意図的につくった。

〈「A 足りない支援物資の配布について」に関する提示資料の一部〉

<p>支援物資が足りないとき</p> <p>① 公平分配（少量でも全員に） 避難者全員に、少量ずつ配布。 メリット 全員が最低限の食料をもらえる。 デメリット 分量不足や空腹感が強くなる。</p> <p>〈過去の事例〉 東日本大震災初期、届いたおにぎりやパンを少しずつ分けて配布し、次の支援到着を待った。</p> 	<p>支援物資が足りないとき</p> <p>② 優先配布（要配慮者を優先） 高齢者・乳幼児・妊婦・病人などを優先して配布。 メリット 健康リスクの高い人を守る。 デメリット 公平性に対する不満が出やすい。 取り合いになることがある。</p> <p>〈過去の事例〉 熊本地震で、食料不足時に「高齢者・乳児家庭」に優先配布した避難所もあった。</p> 	<p>支援物資が足りないとき</p> <p>③ 配布を見送り（保管） 極端に不足している場合、配布せず、次の便で量が確保されてから配布。 メリット 一度に十分な量を配布できる。 デメリット 公平性に対する不満が出やすい。</p> <p>〈過去の事例〉 能登半島地震で、到着した食料が極端に少なく、翌日の追加便を待ってから配布した。</p> 						
<p>支援物資が足りないとき</p> <p>④ 調理・加工で増量 乾パンやレトルトをお湯で柔らかくして分けたり、スープにして量を増やしたりして配布。 メリット 満足感を少しでも高められる。 デメリット 水や燃料が必要。</p> <p>〈過去の事例〉 炊き出しを工夫して少量の食料をスープにして全員に提供した。</p> 	<p>支援物資が足りないとき</p> <p>⑤ 外部調達・持参依頼 近隣店舗や家庭に協力を依頼し、食料を補う。 メリット 不足を早期に解消できる。 デメリット 災害状況によっては困難。</p> <p>〈過去の事例〉 避難所運営者が、近隣スーパーと連携して食料を確保した。</p> 	<p>防災対策課 〇〇さんの経験談</p> <p>避難所へ入った1月11日にはかなりの物資が届いていた。</p> <p>自衛隊などの関係機関が届けてくれた</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>課題</th> <th>対応</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>・保管場所がバラバラで数の把握が難しい。</td> <td>・保管場所を一か所にまとめることから始めた。</td> </tr> <tr> <td>・希望する物が届かず、届くまでに時間がかかる。</td> <td>・物資拠点の体育館に若林さんたちが直接取りに行った。他の避難所と連絡し合い、物資の受け渡しをした。</td> </tr> </tbody> </table>	課題	対応	・保管場所がバラバラで数の把握が難しい。	・保管場所を一か所にまとめることから始めた。	・希望する物が届かず、届くまでに時間がかかる。	・物資拠点の体育館に若林さんたちが直接取りに行った。他の避難所と連絡し合い、物資の受け渡しをした。
課題	対応							
・保管場所がバラバラで数の把握が難しい。	・保管場所を一か所にまとめることから始めた。							
・希望する物が届かず、届くまでに時間がかかる。	・物資拠点の体育館に若林さんたちが直接取りに行った。他の避難所と連絡し合い、物資の受け渡しをした。							

最後に、各自が学習の振り返りを行い、今回の気づきや今後自分にできそうなことを記述した。

④検討するための調査について

本実践では、学習後に生徒が記述した振り返り文をテキストマイニングで分析し、学習を通して「地域の一員として巨大地震発生時の避難所運営に参画しようとする意識が育成されたか」について検討した。生徒には「学習を通しての気づきや、避難所で大切だと思うこと」を問いかけ、自由記述を収集した。調査対象は、学内でも特に外国にルーツのある生徒の割合の高い学級、28件の記述（そのうち4件は外国にルーツのある生徒の振り返り）を抽出した。

生徒の自由記述は、個人が特定されないように整理し、外国にルーツがあるかないかのみ、わかるようにした。自由記述を分析する際は、避難所運営に参画に関する内容を、7つのカテゴリーに分類した。各カテゴリーの内容と、カテゴリー別に記述内容を分類する際に使用した検出語彙を示した表（表2）を以下に示す。

表 2 カテゴリー別の内容と検出語彙

カテゴリー	内容	語彙
役割・運営	避難所運営のための役割分担やルールについて	役割、運営、班、受付、係、ルール、優先順位、指示
具体行動	学んだことをもとに移す、具体的な行動について	手伝う、配る、分け合う、準備する、用意する、声をかけ合う、行動、実行
協力・思いやり	避難者同士の協力や助け合い、思いやりについて	協力、助け合う、譲り合い、思いやり、みんな、乗り越える、平和
公平・優先	子どもや高齢者の優先や、公平性等配慮について	平等、子ども、おじいちゃん、お年寄り、高齢者、年配、優先、本当に欲しい人
安全・心理	安心安全な環境づくりや、心身のケアについて	安全、命、体調管理、自己管理、安心、落ち着く、不安、慎重
自己効力感	「～できる」や、「～したい」等の意思表示について	できる、できるかも、まとめられる、したい、努力する
資源	食料や水等の備蓄の準備や、物資の管理について	食料、物資、水、備蓄、防災倉庫、非常バック、非常用持ち出し袋

考察を進めるにあたって、「i カテゴリー別の言及率」と「ii 複数の内容が同時に言及された関係性を示す共起のヒートマップ¹¹⁾」からわかることを、整理していく。

⑤分析の結果と考察

〈i カテゴリー別の言及率〉

カテゴリー別にどれくらいの記述があったか、言及率(図7)を以下に示す。

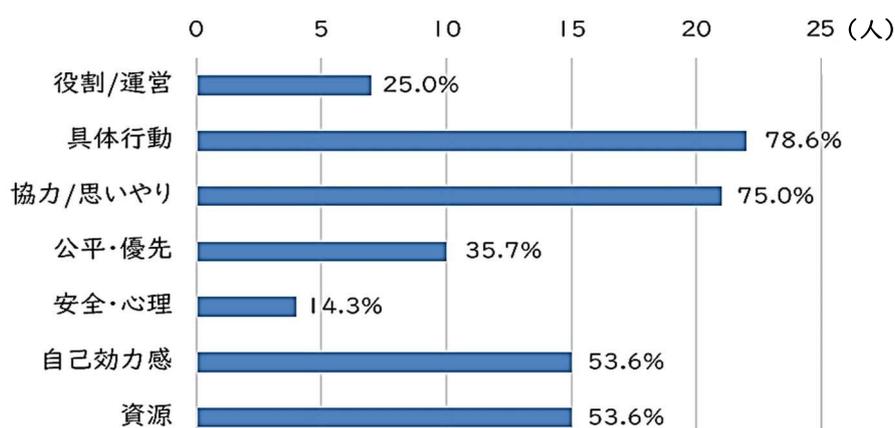


図 7 カテゴリー別の言及率

¹¹⁾ 共起のヒートマップ:2つの項目(単語やカテゴリーなど)が「どれくらい同時に出現したか」を色の濃淡で示した行列図のこと。本研究では、縦横のラベルは分析に用いたカテゴリーとし、2つの項目が同時に出現する頻度が高いほど濃い色、低いほど薄い色で作成。

「具体行動(78.6%)」と「協力・思いやり(75.0%)」の言及率が最も高く、授業を通して、「避難所運営では自分たちが動く」「お互いに支え合う」というイメージが強く育ったと考えられる。実践で用いたロールプレイやシチュエーション学習が、具体的にどのように行動すればよいかを、思い描きやすくした可能性が高い。

続いて、「自己効力感(53.6%)」と「資源(53.6%)」が比較的高い結果となった。「自分にもできそう」「やってみたい」といった前向きな意思と、家庭での備蓄や非常用持ち出し袋への関心が半数を超えて、多くの生徒が防災を自分事として捉え始めている様子がうかがえた。

一方で、「公平・優先(35.7%)」と「役割・運営(25.0%)」の言及は低い。子どもや高齢者等の要支援者への配慮は一定程度みられるものの、公平性を保つための運営方法(受付の流れ、物資配布のルールづくり、優先順位をどうするか)や、設置物や役割分担に関して具体的にイメージすることには至っていないことが示唆される。

「安全・心理(14.3%)」は最も低かった。安心できる環境をつくりたいという気持ちは読み取れるものの、体調面や衛生面の管理、余震時の安全な行動、心理的な安心感につながる環境づくり等の具体的なイメージは、まだ十分に描けないことが分かる。

〈ii 共起(同時言及)のヒートマップ〉

同一の記述内で、2つのカテゴリーが同時に言及された件数がわかるヒートマップを以下に示す。(図8)

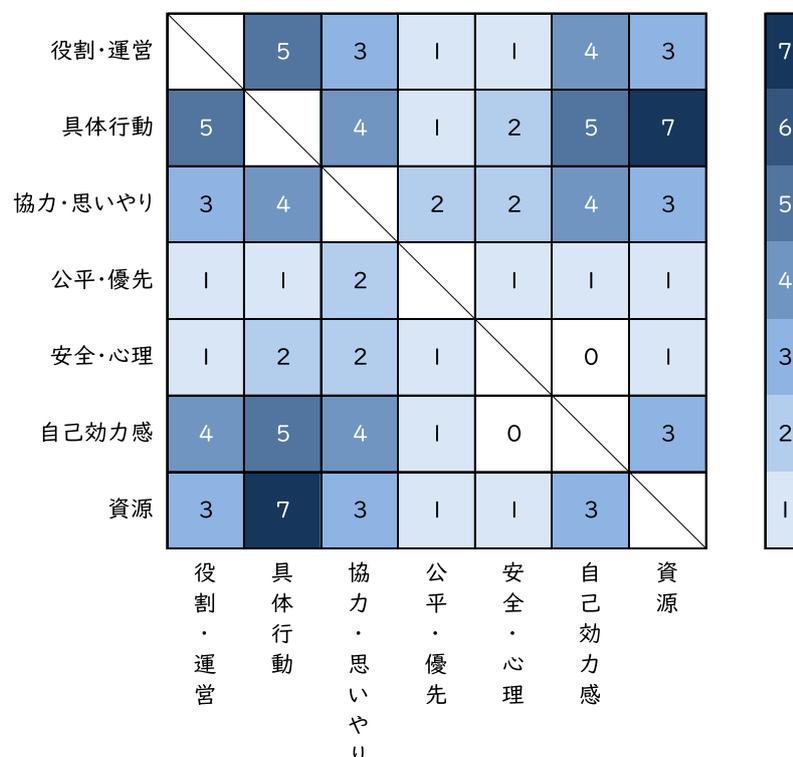


図 8 同一記述内のカテゴリー共起(同時言及)ヒートマップ

「具体行動×資源(7件)」が最も多く、総件数(具体行動:22件、資源:15件)を踏まえると、「資源」では約46.7%(15件中7件)、「具体行動」では約31.8%(22件中7件)が同時に現れている。これらは、「配る、分け合う、備蓄を管理する」といった物資や備蓄に関する行動が具体的にイメージされていることを示す。カテゴリー別の言及率とも整合しており、ロールプレイやシチュエーション学習が、物資の管理や配布に関する理解を深めたと考えられる。

「具体行動×自己効力感(5件)」については、「自己効力感」の記述のうち約33.3%(15件中5件)が「具体行動」と共起しており、「やってみたい」「できそう」という前向きな意思が、「自分が動く」「手伝う」といった主体的な行動のイメージに結びついている様子がうかがえる。

一方で、「役割・運営(7件)」については、「具体行動(5件)」との組み合わせは一定程度みられるものの、「公平・優先(1件)」や「安全・心理(1件)」との共起は少ない。避難所を運営する際の具体的なルールづくり(物資配布のルールづくり、優先順位をどうするか)まで踏み込んだ記述は少なかった。

また、外国にルーツのある生徒の記述では、「協力・思いやり」と「公平運用」への言及が目立ち、「こんな避難所にしたい」と主体的な姿勢がうかがえた。以下に、その記述の一部を示す。

- ・みんなで協力することが大切!命大事! ・みんなのことを考える。
- ・初めて会う人たち同士が集まれる場所だからみんな緊張すると思うからそれをまとめるようにしたいと思った。
- ・避難所で生活するなら、優先する人(子どもや年配)に優先させる。自分は配られなくても耐えられると思います。やはりみんなを平等に平和な生活を送りたいと思います。

これらの記述から、イラスト等の視覚的な手がかりや、仲間と話し合いながら進める班活動といった支援の工夫が、外国ルーツのある生徒の理解を深めることや、防災を自分事として捉えることへ、一定程度寄与したと考えられる。

これらの分析から、避難所運営に主体的に関わろうとする意識が芽生えたこと、資源が不足する状況を想定し「自分の分は自分で用意する」という備えの必要性や、「足りている人は受け取らない」といった公平性を考えた行動のイメージが形成されたことが明らかになった。避難所運営に関わるための第一歩は踏み出すことができ、授業の目標は達成したと言える。今後はHUG等を取り入れ、運営側としての意思決定を体験することで、災害発生時に地域の一員として避難所運営に参画する意識を形成することを目標としたい。

3 【検証3】B中学校における実践的な避難訓練

①実践に取り組むにあたって

B中学校では、年間3回の避難訓練を実施している。今年度初めに行った避難訓練後の振り返りでは、複数の教職員から「生徒の避難の練習だけで留めず、同時に先生にとっても練習になる避難訓練ができる方が良い」という声が上がった。そこで、生徒が自ら判断して行動することに加え、教職員にもその場での判断が求められるような避難訓練を計画することとした。

一般的な避難訓練では、「シェイクアウト¹²後に、すぐに屋外へ避難する」という流れが多いが、大地震の場合は、揺れによって傷病者が発生し、すぐに避難できないことが予測される。実際、過去の震度7クラスの地震では、3割～5割の確率で落下物等による負傷や、パニック・過呼吸等があったと報告されている。しかし、現行の訓練ではこうした傷病者の発生を想定しておらず、生徒・教職員ともに状況や対応のイメージが不足している。南海トラフ巨大地震のような大規模災害では、その場での冷静な判断や対応が不可欠であるため、傷病者が発生することを想定した訓練を行うことは、パニックを少しでも減らすことや実際の災害時での対応力につながると考えた。

加えて、B中学校は、避難困難の目安とされる「津波浸水深 30cm」の浸水域内にある。最新の国による被害想定¹³では、1mの津波到達時間が従来の63分から52分へと短縮された。これに伴い、30cm 到達時間も従来の想定¹⁴（60～90分）より早まる恐れがあり、地震の発生場所によってはさらに迅速な避難が求められる。

B中学校の津波避難先は、平常時でも徒歩50分を要し、発災時の道路寸断や液状化などの被害状況を考えると、不安が残る。車避難による渋滞や、歩行者の巻き込み事故、傷病者の発生など、全員が速やかに避難先に向かえとは限らない。

こうした状況から、避難先の選択肢を検討するため、代替案である「23号中勢バイパス」や「校舎屋上」への避難訓練の必要性がみえてきた。バイパスへの避難は訓練実績があるが、全校生徒での屋上避難の経験がなく、具体的な課題が不透明なままである。「未経験」は災害時の最大の不安要素となるため、屋上への垂直避難の訓練を実施することにした。事前学習と訓練を連動させながら、「傷病者発生を想定し、声掛けや臨機応変な判断が求められる場面を設定した垂直避難の訓練」を計画し、実施する。

¹² シェイクアウト：地震発生時の被害を最小限にするための、一斉参加型の「身を守る安全行動」のこと。「1. まず低く(DROP!)」「2. 頭を守り(COVER!)」「3. 動かない(HOLD ON!)」という3つの安全行動を、場所を問わず一斉に行うのが特徴。

¹³ 内閣府「南海トラフ巨大地震対策について(報告書)」(令和7年3月) 中央防災会議 防災対策実行会議 南海トラフ巨大地震対策検討ワーキンググループ

¹⁴ 三重県「三重県新地震・津波対策行動計画 -わたしたちの「郷土」みえの未来を守るために今、すべきこと-」(平成26年3月)

②避難訓練までの計画

- 7月24日(木)～ 事前アンケート・ヒアリング・訓練内容の検討
 10月1日(水) 職員会議にて提案
 10月22日(水) 校内研修会にて説明
 10月27日(月) けが人役打ち合わせ
 11月4日(火) 事前学習
 11月5日(水) 避難訓練実施
- ・伊勢湾南部を震源とする震度6強の巨大地震が発生した想定
 - ・けが人の有無や状況を確認した後、余震・津波による人身事故を回避するための避難
 - ・本来の避難場所である農業大学校への避難中に津波が襲う可能性が高いため、屋上への垂直避難
- 11月5日(水)～ 事後アンケート

③実際の避難訓練(11月5日5限目実施) ※事前学習の詳細は、巻末に記す。

○ねらい

〈生徒〉

- ・緊急地震速報に対応した避難方法を確認し、一人ひとりが自ら身を守る行動をとる。
- ・校舎内にガラスや落下物が散乱していることをイメージし、落ち着いて屋上へ避難することができる。
- ・余震が繰り返し起こることを知り、手すりを持って避難する。

〈教職員〉

- ・緊急地震速報に対応した適切な避難指示と、生徒の安全確認・人員点呼ができる。
- ・けが人が出た際、迅速かつ確実に情報を伝達し、搬送方法を考え判断する。

○訓練課程

	学習内容・指示内容	行動内容
13:10	第一次警報 (緊急地震速報を鳴らす) 「ただいま、緊急地震速報が発令されました。直ちに机の下にもぐり、机の脚を対角にしっかり掴み、身を守りなさい。机の下に入るだけでは、強い揺れで机が動いてしまうことがあります。机の脚を掴むことで、机が動かず、頭を守ることができます。南海トラフ地震の揺れは、2～	<ul style="list-style-type: none"> ・慌てて飛び出す等はせず、揺れが収まるまで(訓練では1分程度)自分の身を守る行動をとる。 ・机の下に潜り、机の脚を対角に掴み落下物から頭を守る。 ・机がない場合は、姿勢を低くして両手で頭を守る。

	<p>3分続く可能性があります。その間、頭を守る姿勢を崩さず、揺れが収まるまで待ちましょう。机の下に体が入り切らない場合は、頭を優先して机の下に入れなさい。窓ガラスが割れたり、棚から物が落ちたりする危険があります。頭を窓や棚から遠ざけ、安全な方向に向けましょう。」</p>	
<p>13:13</p>	<p>第二次警報 「揺れが収まりました。まだ余震の危険があります。2、3年生は体育館シューズに履き替えてください。安全を確認するまで、安全な姿勢を取り、待機してください。避難の指示があるまで、慌てて動かないことが安全につながります。(けが人役の皆さんは、封筒の中身を確認し、はじめてください。)」 協力生徒は、けが人封筒を開封し、中身を確認したら演技を開始する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・けが人の有無や状況を確認する。 ・けが人が出たら、フロアと本部へ情報を共有する。 <p>※停電により、放送や電話は使えない想定。フロア内で直接情報共有し、本部に救急要請する。情報収集し伝達する際は、中央階段を使用。</p> <p>〈本部〉職員室前廊下</p>
<p>13:25</p>	<p>避難開始 「農業大学校へ避難をするまでに、津波が来る危険があります。水筒と防寒具を持ち、落下物や余震に気を付けながら、屋上へ避難しなさい。避難は3年生から順に、東階段を使って屋上へ避難します。移動教室から教室へ戻る場合は中央階段を使います。負傷者の搬送や、ゆっくり避難する場合も中央階段を使います。では、落ち着いて、声を掛け合いながら行動してください。安全第一です。」 「教室から屋上への避難は、東階段を使います。移動教室から教室へは、中央階段を使います。負傷者の搬送や、怪我等によりゆっくり避難をする場合は、中央階段を使います。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・出入口近くの生徒から避難する。 ・長期避難に備え、水筒と防寒具を持つ。(移動教室で持っていない場合、教室に取りに行ってから屋上へ避難する。) ・級長は出席簿を持って避難する。 ・教職員は生徒が出たことを確認してから避難する。 ・指示が通るよう静かに、慌てず落ち着いて避難し、階段では手すりを掴む。 ・避難途中に余震が来た場合は、その場でしゃがんで姿勢を低くし、頭を守る。
<p>13:35</p>	<p>避難完了 級長、副級長は人員点呼する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・級長→担任→学年主任→教頭

	(級長)「〇年〇組、総員数〇人、欠席〇人、全員集合しました。」	
13:37	講評	・教頭による講話。
13:40	移動	・移動教室のクラスは、授業の荷物を取りに行ってから自分の教室へ戻る。
13:50	教室で振り返り	・アンケートに答える。

○実際の様子

13:10 緊急地震速報発令



緊急地震速報が流れた際、生徒は教職員の指示を待たずにシェイクアウト行動を開始した。机のある教室では、机の下に潜り、脚のある机の場合は両手で脚をつかむ姿勢をとった。机の下に体が入りきらない場合は、頭部を優先して机の下に入れていた。机のない場所では、両手で後頭部を守る姿勢をとっていた。

理科室では放送が聞こえておらず、揺れが収まった後、避難指示が出る前に避難を開始する場面が見られた。

13:13 安全確認・本部始動



揺れがおさまったら、すぐに職員室前廊下に本部が立ち上げられた。本部では、各階および体育館に情報収集の指示が出された。必要に応じて人員を派遣できるよう、本部には待機者も配置していた。体育館から生徒が走って本部に来て、「先生がお腹が痛くて体育館で倒れています。誰か大人の方が来てください」と報告があった。これを受けて、本部から「体育館は搬送が必要です。校長室前の担架をお願いします」と指示が出された。情報収集系の到着を待つ間に、本部ではAEDと救急箱の準備を指示した。各階の情報収集系は、1階、2階、3階の順に本部へ戻ってきた。報告内容は以下の通りである。

1階:「指のけがによる出血1人、気分不良1人、腕の痛み1人。いずれも自力歩行可能」

2階:「体調不良1人。車椅子での移動を希望。他は問題なし。」

3階:報告までに時間を要した。

情報収集がほぼ完了した時点で、屋上の解錠の指示と、各階の階段に教職員を派遣して安全に避難できるよう声かけを行う指示が出された。揺れが収まってから全クラスの状況確認を終え、避難指示の放送が出されるまで要した時間は7分だった。

13:13 各教室や各階での安全確認、情報収集の様子



揺れが収まった後、各教室では授業者によって傷病者の有無が確認された。授業者による確認に加え、周囲の生徒が異変に気づき、声をかける様子も見られた。安全確認中も、生徒は余震の可能性に備え、すぐに安全確保ができる姿勢を維持していた。2、3年生はすぐに体育館シューズに履き替えるよう指示が出された。情報収集系の教職員は、各教室を巡回し、傷病者の人数や状況、搬送の必要性について確認を行った。特に3階では、情報収集係が階段を駆け上がる等、素早い情報収集に努める様子が見られた。

13:20 屋上への避難指示・避難、搬送開始



農業大学校への避難中に津波が到達する可能性があるとの想定により、屋上への垂直避難の指示が出された。長期避難に備え、生徒には水筒や防寒具を持参するよう指示された。避難時には東階段を使用し、余震の発生に備えて、できるだけ手すりを持ちながら移動するよう促された。傷病者の搬送については中央階段を使用し、垂直移動は教職員が担いで行い、水平移動には車椅子や担架を用いた。

屋上へ通じる扉は1か所のみであり、1人ずつ順番に通過する必要があったため、避難には時間を要した。また、訓練前に雨が降っていた影響で屋上の床面が濡れており、滑りやすい状態であったため、生徒は慎重に移動していた。これらの要因が重なり、屋上への避難完了までにさらに時間を要した。

13:35 避難完了・講評



避難完了後、教頭より講評が行われた。内容は、午前10時の緊急地震速報によるシェイクアウト訓練と、今回の避難訓練の2回の実施についての説明があり、今回の訓練では傷病者が発生する状況を想定した初めての取組であったことが伝えられた。

教職員も訓練開始前は緊張していたこと、実際の地震や津波発生時には訓練通りに進むとは限らないこと、そして今回の訓練を通じて得られた気づきを今後の備えにつなげてほしいという呼びかけがあった。生徒には、家庭でも避難場所や備蓄について話し合うよう促された。

避難時の観察として、雨天により床面が濡れていた場所では、スリッパでの歩行が困難であった。体育館シューズやスリッポンは比較的歩行が可能であり、特にスリッポンは履き替えの必要がなく、素早い避難が可能であった。ただし、スリッポンの隙間から水が入り込む様子も確認された。屋上では、複数の脱気口の出っ張りがあり、生徒は足元を確認しながら慎重に避難していた。転倒を防ぐため、周囲に注意を払いながら移動する様子が見られた。

④検討するための調査について

本実践では、事前学習と訓練を連動させながら、「傷病者発生を想定し、声掛けや臨機応変な判断が求められる場面を設定した垂直避難の訓練」を計画し、実施した。その上で、「児童・生徒が主体的に判断し行動する力を育成するには、判断する場面を設定した授業や実践的な避難訓練が有効である」という仮説の妥当性を検証した。アンケート調査は、全校生徒および全教職員を対象とし、2025年9月22日～9月26日に事前調査、事避難訓練実施後の2025年11月5日、6日に事後調査を行った。

調査項目は、避難訓練における知識・行動・心構えに関する生徒の習得状況を把握するために「身につけさせたい力」を基盤として作成し、事前・事後で時制のみ変更した同一内容を用いた。回答は四件法を採用し、得点化した。調査項目は以下の通りである。

- (1) 緊急地震速報が流れてきた時に、自分がとるべき行動ができる(できた)。
- (2) 津波の危険があるときに、どこに避難すれば良いか知っている(わかった)。
- (3) 学校の避難経路や避難場所を把握している(できた)。
- (4) 余震の危険性について知っている(わかった)。
- (5) 地震が発生したとき、どんな危険があり、どんな行動が必要か説明できる。(事後も同一設問)
- (6) 先生の指示がなくても、状況に応じて自分で判断して行動できると思う(できた)。
- (7) 周囲の人と協力して避難行動ができると思う(できた)。
- (8) けが人が出たとき、自分は落ち着いて行動できると思う(できた)。
- (9) 避難訓練は、自分の命を守るために役立つと感じる(感じた)。

調査の結果をもとに算出した、各項目の平均値を事前と事後で比較し、自由記述欄において避難訓練における具体的な行動や気づきを収集しカテゴリー別に分析した。なお、分析には、事前・事後ともに回答した439人(1年生150人、2年生140人、3年生149人)および教職員25人のデータを使用した。「i 実施前後の生徒の変容」、「ii 実施前後の教職員の変容」に分けて考察する。

⑤分析の結果と考察

〈i 実施前後の生徒の変容〉

9項目すべてにおいて、事前より事後で平均値が上昇した。特に変化が大きかった4項目について、考察を進めていく。なお、本実践のように事前学習と避難訓練を連動させた実践的な訓練と、従来型の避難訓練との違いを検討するため、B中学校と規模が近く、同時期に同じアンケート調査を実施したC中学校(事前学習なし)と比較したものを示す。事前調査の平均値は、C中学校の方がわずかに低いものの、両校の傾向は近く、比較対象として妥当であると判断した。

1つ目の項目、Q1「緊急地震速報が流れてきた時に、自分がとるべき行動ができる(できた)。」の結果を以下に示す。(図9、図10)

—●— 1年生 ●●●● 2年生 —●— 3年生

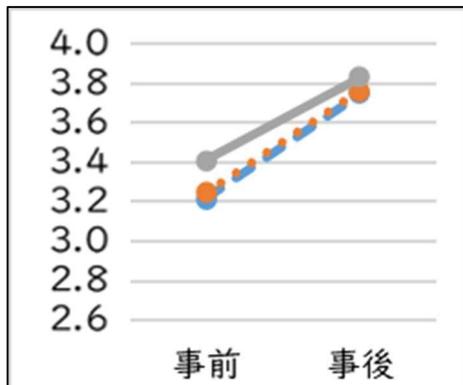


図9 実践型訓練B中学校における平均値の推移 (Q1)

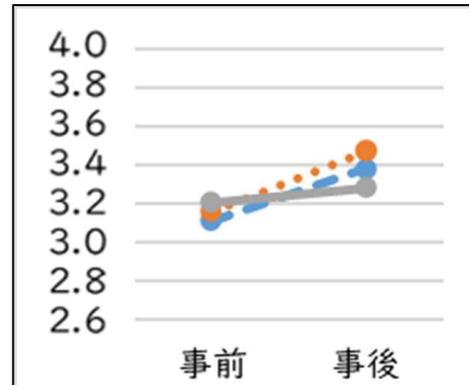


図10 従来型訓練C中学校における平均値の推移 (Q1)

B中学校では、事前は、「どちらかというと思う」が204件、「思う」が183件だった。一方、事後では、「どちらかというと思う」が92件に減り、「思う」が345件に増加した。つまり、多くの生徒が「身を守る行動ができるようになった」ことが分かる。

この背景として、事前学習で「身を守るためにとるべき行動」の目的を明確にしたこと、学級担任による丁寧な指導で手順を理解したことが挙げられる。

2つ目の項目、Q4「余震の危険性について知っている(わかった)。」の結果を以下に示す。(図11、図12)

—●— 1年生 ●●●● 2年生 —●— 3年生

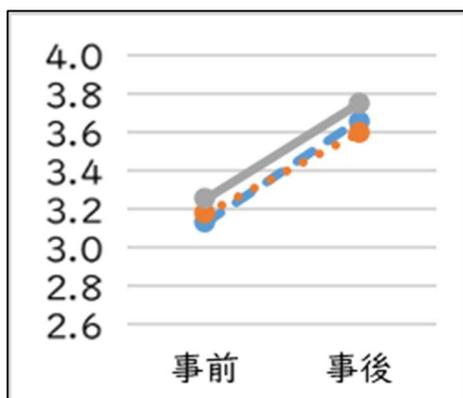


図11 実践型訓練B中学校における平均値の推移 (Q4)

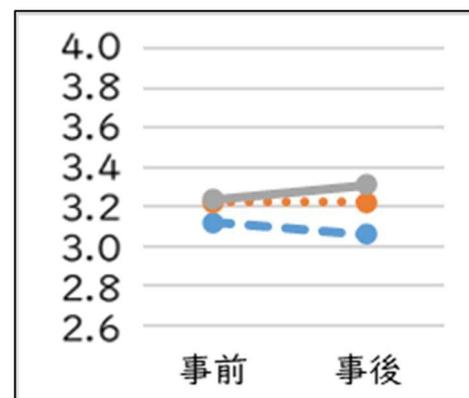


図12 従来型訓練C中学校における平均値の推移 (Q4)

B中学校では、「どちらかというと思わない」が91件から12件まで大きく減少したことから、多くの生徒が「余震の危険性を理解した」ことが分かる。

従来の避難訓練では、余震について触れることが少ないという課題がある。一方、B中学校では、余震のリスクや身を守る方法(階段では手すりをつかむ等)を事前学習で扱

い、訓練の中にも余震の想定を組み込んだ。こうした「説明→理解→実践」の流れが理解の定着に寄与したと考えられる。

3つ目の項目、Q6「先生の指示がなくても、状況に応じて自分で判断して行動できると思う(できた)。」の結果を以下に示す。(図13、図14)

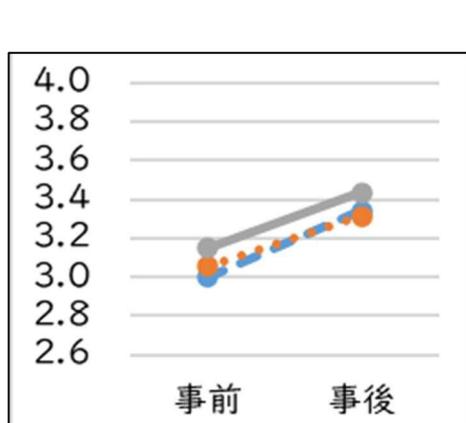


図 13 実践型訓練B中学校における平均値の推移 (Q6)

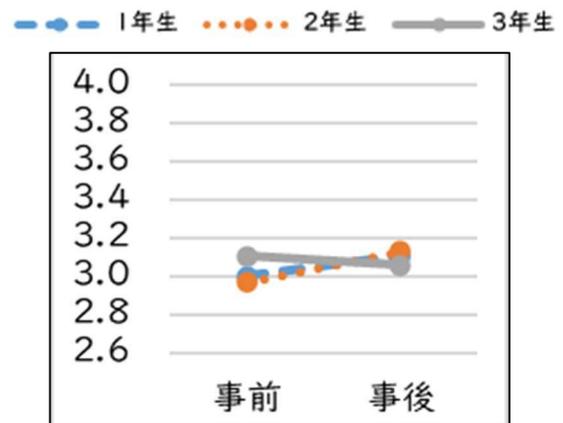


図 14 従来型訓練C中学校における平均値の推移 (Q6)

C中学校では、1・2年生ともに平均値の上昇は少しだけだった。一方、B中学校では、「どちらかというと思わない/思わない」の回答が85件から52件へと減少し、「自分で判断して行動できる」という自己効力感が高まっていることが分かる。

この項目は、Q1やQ4のような知識を学べば上昇しやすい項目ほど、大きな変化は出にくい。しかし、B中学校の訓練では「判断が必要な場面」を設定し、実際に経験したことで、自律して動く力の底上げに寄与したと考えられる。

4つ目の項目、Q8「けが人が出たとき、自分は落ち着いて行動できると思う(できた)。」の結果を以下に示す。(図15、図16)

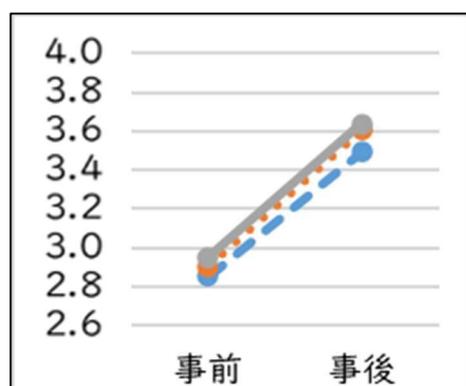


図 15 実践型訓練B中学校における平均値の推移 (Q8)

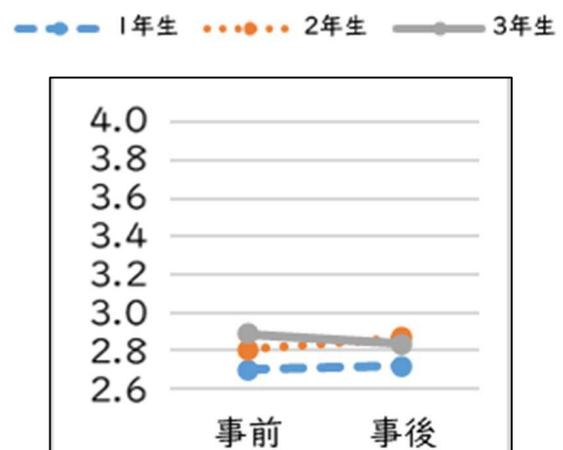


図 16 従来型訓練C中学校における平均値の推移 (Q8)

C中学校では変化がほとんど見られなかった。一方、B中学校では大きな変化が確認された。「どちらかというと思う」が137件から127件に、「思う」が103件から286件になり、「どちらかというと思う」から「思う」へ移行した生徒が多く、落ち着いて対応できる自信が大きく伸びていることが読み取れる。事前学習で傷病者対応の見通しをつけ、訓練内の傷病者が発生する場面で実際に体験したことがこの結果につながったと言える。「教職員が、落ち着かせる声掛けや一時対応を実演した」ことや、「余裕のある生徒が実際に声掛けを体験した」ことで具体的な行動のイメージができ、傷病者対応への自己効力感の向上につながったといえる。もちろん、訓練は実際に出血や強い衝撃を伴うわけではないため、災害時に同程度の落ち着きを保てない可能性がある。しかし、全く経験がない状態と比べれば、本実践のような訓練は、確かな効果があることが示唆される。

次に、自由記述による3つの調査項目の変容を示す。質問内容は以下の通りである。

(1)	地震が発生したときに自分がとるべき行動についてわかったことは何ですか。
(2)	今回の避難訓練で、自分が判断して行動した場面があれば、どんな場面で何をしましたか教えてください。
(3)	今回の避難訓練を通しての気づきや、今後の訓練や本当に地震が来た時に活かせることを教えてください。

Q1「地震が発生したときに自分がとるべき行動について、わかったことは何ですか。」において、記述内容に含まれる訓練に関する23種類のキーワードの頻出数を数え、事前と事後で比較した。その結果、キーワードの総数は事前351語から事後651語へ約1.85倍に増加した。(表3)

表 3 学習前後におけるキーワードの頻出数の差

キーワード	前	後	差	キーワード	前	後	差
机の下に隠れる	107	127	20	海から離れる	1	0	-1
頭を守る	44	141	97	ガスを止める/火	1	0	-1
ドア・窓を開ける/出口確保	13	5	-8	避難する/屋上へ	78	102	24
ダンゴムシポーズ	12	20	8	走らない/静かに	7	63	56
先生・放送の指示	12	21	9	余震に注意	3	25	22
落ちる/倒れる/動くものから離れる	9	5	-4	手すり・壁を持つ	0	19	19
おはしも	9	5	-4	対角の脚を持つ	2	18	16
農業大学校などへ	9	9	0	落下物から離れる/避ける	10	24	14
情報収集(テレビ・ラジオ・ニュース)	8	0	-8	怪我人対応/大人に連絡	5	30	25
協力・声かけ/周囲確認	7	15	8	自分で判断する	3	12	9
靴・スリッパ・体育館シューズ	4	3	-1	足元注意	3	7	4
ブロック塀・電柱・木から離れる	4	0	-4				
				合計件数	351	651	300

「頭を守る(44→141,+97)」「走らない/静かに(7→63,+56)」が大きく増加した。これに加えて、事前にはほとんど見られなかった「余震に注意(3→22,+19)」、「手す

り・壁を持つ(0→19,+19)」「対角の脚を持つ(2→「18,+16)」等の具体的な行動に関する語が、事後では多く出現した。

これは、単に覚えた言葉が増加した「量的な変化」とどまらず、訓練での経験によって知識を身につけて行動できるようになった「質的な変化」が認められたといえる。事前学習で目的を理解し具体的な避難行動の見通しを持たせたことや、実際に訓練で繰り返し行動したことが、生徒の「わかる」や「できる」につながったと考えられる。

次に、Q1「地震が発生したときに自分がとるべき行動について、わかったことは何ですか。」において、1つの自由記述内で、どのキーワードが同時に出現しているか(共起関係)を分析した。以下に、共起関係を事前と事後で比較した表を示す。(表4)

表 4 学習前後におけるキーワード別の共起関係

語A	語B	前	後	差
おはしも	協力・声がけ	0	1	1
おはしも	走らない/静かに	0	1	1
おはしも	避難する/屋上へ	0	1	1
ダンゴムシポーズ	机の下に隠れる	5	13	8
ダンゴムシポーズ	対角の脚を持つ	0	1	1
ダンゴムシポーズ	頭を守る	3	11	8
ダンゴムシポーズ	落下物から離れる	2	2	0
怪我人対応/大人に連絡	机の下に隠れる	1	3	2
怪我人対応/大人に連絡	頭を守る	0	3	3
怪我人対応/大人に連絡	避難する/屋上へ	1	3	2
机の下に隠れる	自分で判断する	1	1	0
机の下に隠れる	走らない/静かに	1	6	5
机の下に隠れる	頭を守る	16	44	28
机の下に隠れる	避難する/屋上へ	17	30	13
机の下に隠れる	落下物から離れる	2	4	2
協力・声がけ	走らない/静かに	1	1	0
協力・声がけ	頭を守る	1	5	4
協力・声がけ	避難する/屋上へ	3	3	0
自分で判断する	走らない/静かに	0	3	3
手すり・壁を持つ	頭を守る	0	9	9
手すり・壁を持つ	避難する/屋上へ	0	9	9
手すり・壁を持つ	落下物から離れる	0	2	2
先生の指示を聞く	机の下に隠れる	3	4	1
先生の指示を聞く	自分で判断する	0	2	2
先生の指示を聞く	走らない/静かに	2	3	1
先生の指示を聞く	頭を守る	1	7	6
先生の指示を聞く	落下物から離れる	0	1	1
走らない/静かに	頭を守る	0	7	7
走らない/静かに	避難する/屋上へ	2	12	10
対角の脚を持つ	机の下に隠れる	0	16	16
対角の脚を持つ	手すり・壁を持つ	0	1	1
対角の脚を持つ	走らない/静かに	0	1	1
対角の脚を持つ	頭を守る	0	9	9
対角の脚を持つ	避難する/屋上へ	0	5	5
避難する/屋上へ	頭を守る	6	34	28
余震に注意	机の下に隠れる	1	3	2
余震に注意	手すり・壁を持つ	0	7	7
余震に注意	先生の指示を聞く	0	1	1
余震に注意	走らない/静かに	0	1	1
余震に注意	頭を守る	1	14	13
余震に注意	避難する/屋上へ	1	13	12
余震に注意	落下物から離れる	0	6	6
落下物から離れる	頭を守る	1	9	8
落下物から離れる	避難する/屋上へ	2	9	7

事後で頻出数の多かったキーワード同士の結びつきが、学習によって強くなっていることが確認された。特に、次の6つの共起が大きく伸びた。

- ・「机の下に隠れる」×「頭を守る」(+28)
- ・「避難する/屋上へ」×「頭を守る」(+28)
- ・「対角の脚を持つ」×「机の下に隠れる」(+16)
- ・「机の下に隠れる」×「避難する/屋上へ」(+13)
- ・「余震に注意」×「頭を守る」(+13)
- ・「余震に注意」×「避難する/屋上へ」(+12)

事前は「机の下に隠れる」「避難する」といった単発の行動を個別に記述するものが中心だったが、事後では「頭を守る→机の下に隠れる→走らない→余震に注意する→落下物を避ける→手すりを持つ→屋上へ避難する」のように、複数の行動をつなげて記述される傾向へと変化した。

キーワードの頻出数が増加に加えて共起関係が広がったことから、単に知識やできることが増えただけでなく、「何のためにそれをするのか理解し、バラバラだった知識が一つの意味のある流れとしてつながった」と言える。

次に、Q2「今回の避難訓練で、自分が判断して行動した場面があれば、どんな場面で何をしたか教えてください」について、記述内容をカテゴリーに分類し、件数を集計した。以下に、特に件数多かったカテゴリーと、その代表的な記述例を示す。(表5)

表 5 カテゴリー別の記述例と記述件数

カテゴリー、記述例	件数
<u>一次避難の即応(守る・隠れる)</u> ・警報が鳴ったらすぐに机の下に隠れ、サルのポーズを取れた。 ・アラートがなったとき瞬時に頭を守る体勢になれた。教室から屋上へと移動するとき頭を守りながら移動ができた。	61
<u>二次避難(屋上・高所へ)</u> ・屋上まで上がるときに手で頭を守り、手すりを使って階段を登った。 ・屋上へ避難するときに近くの友達の体調確認をすることができた。	14
<u>救護・支援</u> ・けが人がいる時に支えられた。けが人役を担架で運ぶ時は足から運ぶ。 ・怪我人が出た時に、体育館シューズを渡したこと。	13
<u>安全移動の判断(手すり・壁)</u> ・屋上まで上がるときに手で頭を守り、手すりを使って階段を登った。 ・みんなに手すりを持つように言った	12
<u>混雑時の判断(譲り合い・通路確保)</u> ・負傷者の人が通りやすいように通路をあけた ・先生が道を開けてと声をかけた時、自分も道を開けてと声をかけられた。	10
<u>伝達・注意喚起</u> ・しっかりと「〇〇先生が倒れています!」と言って動けたこと。 ・真剣にやっていない人がいたから注意した。	10

「一次避難の即応(守る・隠れる)」が最も多く61件となり、実際の訓練において、ほぼすべての生徒が素早く身を守る行動ができたことが、結果にも表れた。

「二次避難(屋上・高所へ)(14件)」では、手すりを使う、頭を守りながら移動するといった安全に配慮した移動の工夫に関する記述が多く見られた。

また、「救護・支援(13件)」、「安全移動の判断(手すり・壁)(12件)」、「混雑時の判断(譲り合い・通路確保)(10件)」、「伝達・注意喚起(10件)」では、けが人を支える、通路をあける、周囲に声をかける等、他者に配慮する行動に関する記述が多く見られた。

これらの記述は、個人としてだけでなく、集団として安全に避難する意識が育ちつつあることを示していると考えられる。

次に、Q3「今回の避難訓練を通しての気づきや、今後の訓練や本当に地震が来た時に活かせることを教えてください」について、自由記述を内容に基づいてカテゴリー別に分け、件数を集計した。結果を以下に示す。(表6)

表 6 カテゴリー別件数

カテゴリー	件数	カテゴリー	件数
落ち着いて行動	85	指示を聞く/放送	18
怪我人対応	52	余震に注意	16
反省・改善意欲	40	家庭連携・備え	15
避難経路・場所理解	35	手すり・壁際	14
頭を守る	35	危険回避(ガラス等)	9
協力・声かけ	20	おはしも	7
机の下に隠れる	20	自分で判断	6

記述の中では、「落ち着いて行動(85件)」「怪我人対応(52件)」「反省・改善意欲(40件)」「避難経路・場所理解(35件)」「頭を守る(35件)」が多かった。訓練で実際に経験した行動に関する気づきが多くみられるなかで、「反省・改善意欲」に分類される記述が相当数あったことが特徴的である。

このカテゴリーには、「次回の訓練で気をつけたい点」「自分自身の行動の改善点」「実際の災害時にどう活かしたいか」「集団で避難する時に配慮すべき点」等、今後の行動をより良くしようとする前向きな姿勢が多く含まれていた。

このことから、生徒が訓練を経験して終わりにせず、自分で振り返って次につなげようと内省していることが読み取れる。

「反省・改善意欲」に分類された自由記述を、内容の近さによって8項目に整理した。代表的な記述例を示す。

① すみやかな行動、整列の改善

- ・屋上で並ぶ時に時間がかかったけど、もっと早く並んだ方がいいと思った。
- ・押し合わずすみやかに屋上に上がって、もっと素早く整列できるようにしたい。

② 静粛・指示伝達の改善

- ・やっぱり喋ってしまう人がいるので先生たちの指示が聞こえるようにするために落ち着いて行動したい。
- ・もし地震が起きたら放送はされないので、自分で状況を判断することが大切。
- ・先生が怪我をして指令が通らないときも考えるべきだと思った。

③ 雨天・滑り対策(足元安全)

- ・屋上の地面は雨だと滑るから本当に地震が来た時も気をつけたい。
- ・滑ることがあるから足元にも注意する。
- ・走る事はなく、早歩きくらいで冷静に移動する。

④ 手すり・階段安全の徹底

- ・階段をのぼりおりする時は、頭を守りながら手すりを持つ。
- ・余震が続いたりするから手すりを持って登ったりする。
- ・これからも、避難する時も頭部を守ったり、手すりにつかまったり対策したい。

⑤ 譲り合い・通路確保(人の流れ)

- ・譲り合って避難することが最も安全で早く避難できると思う。
- ・焦らず順番を守って避難すると早く逃げられることが分かったから次もそうする。
- ・誰かが怪我した場合は優先して避難させる。押し合いにならないようにする。
- ・しっかりと声を出して「通らせて!」という人たちがいて、やればよかった。
次は自分もそうしたい。

⑥ 避難経路・場所の拡張(混雑対策)

- ・地域の人も来たら屋上だけでは入りきらないから、3階も使わなければいけない。
- ・他の避難場所を確認することが大事だと思った。

⑦ 持ち物・備えの見直し

- ・早く履き替えるためにも、体育館シューズは机の横にかけておくべき。
- ・防寒具はしっかり着た方が良く、火事用にハンカチも持っておいた方がいい。
- ・2.3年生はいちいち体育館シューズに変えないといけないからスリッポンがいい。

⑧ 代替指令・主体性の強化

- ・先生が怪我をして指令が通らないときの場合も考える。
- ・先生の判断を待つんじゃなくて主体的に動く!!
- ・冷静にみんなの指揮をとって、少しでも皆を安心させたい。

このように整理をすると、記述が単なる事実の振り返り(何をしたか)にとどまらず、訓練を自分事として捉え、「次にどう改善するか」「実際の災害時にどう生かすか」を具体的な行動として言語化していることが明確になる。

特に、「避難(移動)の質」「余震への対応」「傷病者への対応」「情報共有」において判断する場面を訓練に取り入れたことで、実際の経験をもとに生徒自身が改善点を見出し、訓練の質を高めようとする改善のサイクルが動き始めたと考えられる。

今回の訓練を一度で終わらせず、今後も継続して実践的な避難訓練に取り組むことで、こうした学びはさらに定着し、主体的に「判断し行動できる」力の育成へとつながることが示唆される。

〈ii 実施前後の教職員の変容〉

前述した「i 実施前後の生徒の変容」と同様に、教職員を対象としたアンケート調査を実施し、結果をもとに避難訓練の効果を検証した。調査項目は、以下の通りである。

- (1) 避難訓練の際、目的や流れを事前に理解している(していた)。
- (2) 生徒の安全を確保するための配慮や声掛けができています。(できた)。
- (3) 生徒の人数確認を正確かつ迅速に行っている(行った)。
- (4) 避難経路を理解し、誘導方法を把握している(した)。
- (5) 生徒の混乱や不安を落ち着かせることができる(できた)。
- (6) けが人が出た場合、応急手当・搬送等の判断や対応を行うことができる(できた)。
- (7) 災害時の対応について、教職員同士で円滑に情報共有や連携ができる(できた)。
- (8) 災害発生時の指示系統や役割分担を理解している(できた)。
- (9) 避難訓練は、自分や生徒の命を守るために役立つと感じる(感じた)。
- (10) 津波避難のために、どこへ、どの経路で避難するのか理解している(できた)。
- (11) 生徒は、災害時に自分で考えて行動することができる(できた)。
- (12) 生徒は、教職員の指示がなくても生徒同士で協力して避難できる(できた)。

教職員を対象とした調査では、上記のすべての項目において、事前より事後で平均値が上昇した。ここでは、特に変化が大きかった5項目について、結果と考察を述べる。

1つ目の項目、Q2「生徒の安全を確保するための配慮や声掛けができています(できた)」の結果を右に示す。(図17)

「そう思う」は24%→68%へと大きく増加し、「どちらかというと思わない」が0件となった。事前段階でも比較的高い平均値であったが、事前に「声掛け」や「安全確認」といった目標を明確に共有し、訓練の場でそれらを具体的に実行・反復したことが肯定的な回答の増加につながったと考えられる。

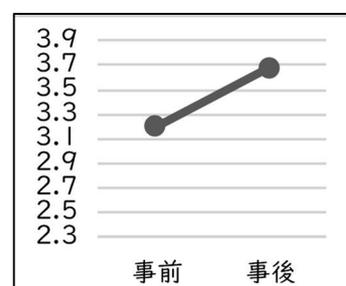


図 17
平均値の推移(Q2)

2つ目の項目、Q6「けが人が出た場合、応急手当・搬送等の判断や対応を行うことができる(できた)」の結果を右に示す。(図18)

「どちらかというと思わない」は48%→4%へと大幅に減少した。日常的にはほとんど経験する機会がない場面であるにもかかわらず、傷病者発生を想定したシナリオを訓練に組み込んだことにより、判断や対応への見通しが持てるようになり、教職員の判断・対応に対する自己効力感が向上したと解釈できる。

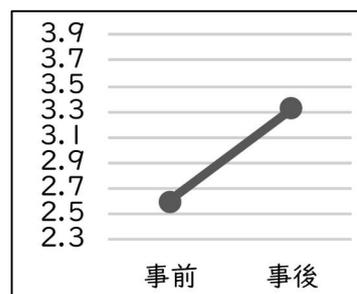


図 18
平均値の推移 (Q6)

3つ目の項目、Q7「災害時の対応について、教職員同士で円滑に情報共有や連携ができる(できた)」の結果を右に示す。(図19)

「どちらかというと思わない」は20%→0%に減少し、「そう思う」は12%から40%に増加した。この変化は、事前に災害時の情報共有の方法を確認したことに加えて、訓練では停電で放送機器が使えない状況を想定し、要点のみを簡潔に口頭で伝える運用を試行したことが大きいと考えられる。これらの実践により、「情報をどのように共有するか」「どのタイミングで誰が動くか」「どのように連携を取るか」といった手順が教職員間で少しずつ共有され、情報伝達や連携の仕方が少しずつ構築され始めている様子が見えてくる。

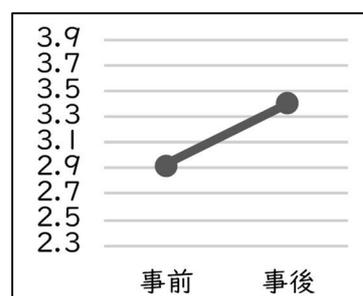


図 19
平均値の推移 (Q7)

4つ目の項目、Q11「生徒は、災害時に自分で考えて行動することができる(できた)」の結果を右に示す。(図20)

「そう思う」は0%→48%へ大きく増加した。事前調査では、教職員の多くが生徒の自立的な判断力に強い確信を持っていなかったが、判断する場面を含む実践的な訓練の過程で、生徒が自分で考えて動く姿を実際に観察できたことが、肯定的な評価につながったと考えられる。また、分布としても、「どちらかというと思わない」から「そう思う」への移行がみられ、教職員が生徒の主体的な行動をより確信をもって認める方向に変化が生じていることが確認できる。

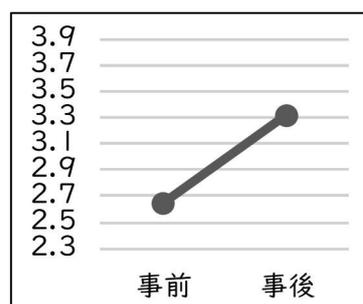


図 20
平均値の推移 (Q11)

5つ目の項目、Q12「生徒は、教職員の指示がなくても生徒同士で協力して避難できる(できた)」の結果を右に示す。(図21)

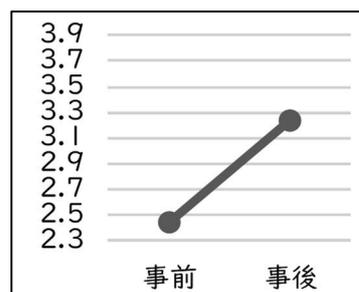


図 21

平均値の推移(Q12)

平均値は2.4→3.2と、今回の13項目の中で最も大きく増加した項目であった。「そう思う」が0%→36%へ増加し、「どちらかというと思わない」が52%→8%へ減少したという大きな改善が見られた。この変化は、避難訓練の場面で生徒が自発的に声を掛け合い、協力しながら行動する姿を

教職員が実際に確認できたことが影響していると考えられる。つまり「生徒は協力して動く力がある」という教職員の見立てへと、訓練を通して肯定的に変化したといえる。

この変化は前項のQ11(生徒が自分で考えて行動できる)の変容とも連動しており、教職員が生徒の主体性をより信頼する方向へ評価が移行したことが読み取れる。

Q11とQ12の両結果から、教職員の指示に依存しすぎる訓練から脱却し、判断する場面を含む訓練の設計は、妥当であり効果が確認されたと考えられる。

次に、訓練全体を通して教職員が感じた気づきや今後に向けた改善点について自由記述の分析を行い、実践的な避難訓練の効果を検証する。調査項目は以下の通りである。

- (1) けが人(傷病者)対応の中で、できたことは何ですか。
- (2) けが人(傷病者)対応の中で、難しかったことは何ですか。

まず、Q1「けが人(傷病者)対応の中で、できたこと」について、記述内容を5つの項目に分類し、項目別の件数と、代表的な記述例を以下に示す。

①搬送・移動対応 (5件)

- ・担架を運び、生徒をのせること
- ・気分の悪い生徒をおぶって屋上へ避難させた
- ・状況の確認を行い、運ぶことが出来た
- ・担架の必要性を確認後、すぐに応援を呼び、対応することができた

②状況確認・判断 (4件)

- ・負傷状況の確認、応急処置
- ・情報収集をして、搬送が必要か等の判断
- ・状況把握と傷病者の様子を確認できた
- ・全体に確認した後、怪我人に対して適切な対応をすることができた

③応急処置 (1件)

- ・軽いケガの出血は、教室にある救急バッグの絆創膏等で対応できた

④声かけ・心理的サポート(8件)

- ・過呼吸の生徒に対する声かけ、付き添い
- ・傷病者への声掛け、状況の把握
- ・こまめに声をかけ、安心させることができた
- ・けが人がいないか声かけをした
- ・過呼吸役生徒に「座るように」や、「大丈夫だよ」といった声掛け

⑤ 応援・報告 (3件)

- ・迅速に大声で助けを呼んだ
- ・現場に生徒だけを残さずに、他の応援の人を呼ぶことができた

自由記述では、「声かけ」「安心」「落ち着かせる」といった心理的な対応に関する語が多くみられ、教職員が生徒に対して落ち着きを促し、不安を和らげるための働きかけができたことがうかがえる。次いで、「担架」「運ぶ」「応急処置」等、担架搬送や軽度の傷病対応に関する記述が多く、傷病者対応の基本的な手順を理解し、実行できたと評価できる。

さらに、「報告」「応援を呼ぶ」といった連絡・応援要請に関する記述が一定数確認されており、情報伝達の経験もできたと考えられる。

次に、Q2「けが人(傷病者)対応の中で、難しかったこと」について、記述内容を5つの項目に分類し、項目別の件数と、代表的な記述例を以下に示す。

① 対応の不安・判断・優先順位 (6件)

- ・けが人が出た時、適切に対応できるか不安。
- ・教室にある救急バックで対応できるかを判断するのが難しい。
- ・傷病者の対応をしながら状況判断を同時にするのは難しかった。
- ・気分が悪い生徒を避難させた後、どうすれば良いのかわからなかった。
- ・同時に多発していたので、俯瞰することができなかった。

② 傾聴・コミュニケーション (4件)

- ・生徒が不安を感じて、口数が少なく、本人の気持ちを聞き取るのが難しかった。
- ・声をかけ続けるのが大変だった。

③ 動線混雑・けが人搬送 (3件)

- ・狭く混雑している階段を先に優先して通すことが難しかった。
- ・教職員の人数が限られている中で担架を必要とする傷病人に対応することは、難しいのではないかと感じた。特に自分より体格のよい人だったとしたら、運ぶことが難しいと思われる。

④ 資機材不足 (2件)

- ・担架が2つしかなく、運ぶ順番の優先順位づけが難しい。
- ・足をケガしている生徒を運ぶ作業、担架がないと厳しい。

⑤ 情報収集・伝達・距離 (2件)

- ・職員室前と3階の距離があり、集約と伝達方法が難しい。
- ・状況の把握を素早くすることが難しかった。

自由記述では、「優先順位」「判断」「俯瞰」等といった語が多くみられ、複数の傷病者対応が同時に発生し、さらに担架が不足した状況で、誰をどの順に搬送するかを判断する

難しさが明らかになった。階段しか使えないことや体格差があること等、搬送を行う際の物理的な課題を指摘する記述も多く見られた。

さらに、3階と本部（1階職員室前）の距離が離れていることにより、情報の収集・整理が進みにくいという課題が示され、情報共有の難しさが浮き彫りになった。

これらの記述から、教職員は場面ごとに臨機応変な判断が求められる状況に戸惑いを感じていたことが読み取れる。しかし、実際の災害においては、むしろこの臨機応変さは不可欠である。訓練の段階で不安や難しさを感じるということは、実際の災害ではさらに大きな混乱が生じることを示唆しており、その場で判断する力を養うための教職員の訓練の必要性と意義が改めて明らかになった。

今回の訓練では、「本番に近い」「臨場感があった」「真剣に取り組めた」といった前向きな評価が多く寄せられた。また、訓練を通して「自分たちに足りない点に気づけた」「事前に考えるきっかけになった」「防災意識が高まった」といった学びが確認できた。

これらのことから、生徒だけでなく教職員も当事者としての意識を高めることができ、訓練が課題を見つける場として効果的に機能していたことがうかがえる。

一方で、運用面ではいくつかの課題が明らかになった。たとえば、移動時間の長さや混雑緩和の方法、持ち物（水筒や靴等）の扱い、情報伝達の手段や停電時の対応策、傷病者への対応や役割分担の整理、避難中の生徒の規律保持等である。これらの点について改善策を段階的に検討・実施していくことで、次回以降の訓練の安全性と実効性をさらに高めることができるだろう。今回のような実践的な避難訓練を継続的に行うことで、学校全体の防災力をより一層向上できるよう取り組んでいきたい。

IV 研究のまとめ

本研究では、誰一人取り残さない「自ら判断し行動する」防災学習と題し、「児童・生徒が主体的に判断し行動する力を育成するためには、判断する場面を設定した授業や実践的な避難訓練が効果的である」という仮説のもと、外国にルーツのある児童・生徒への言語支援の工夫と、実践的な避難訓練の効果検証を行った。目的が達成されたのかを明らかにし、3つの検証における成果をもとに、課題と今後の展望を総括する。

1 言語的な課題に左右されない学びの保障

外国にルーツのある児童・生徒を含むすべての児童・生徒が、災害発生時に必要な情報を理解し、適切に行動できるようにするためには、言語的な課題に左右されない学びが不可欠である。そこで本研究では、視覚教材(番組・写真・イラスト)や、やさしい日本語、1人1台端末の翻訳機能、協働的な対話活動等を組み合わせ、言語的な課題があっても説明や内容を理解し、授業中に思考を止めない工夫を行った。さらに、ロールプレイやシナリオ型学習を取り入れ、正解のない課題に対して納得解を見いだし判断する場面を設定した。これらの実践を、A中学校第1学年の授業および、全学年を対象としたシナリオ学習を通して検証した。

検証の結果、第1学年の授業では、大雨による浸水や地震の揺れ等、誰にでも起こりうる災害に焦点を当てたことから、生徒全体の傾向として危機意識の一定の向上が見られた。また、外国にルーツのある生徒とその他の生徒の平均得点を比較したところ、全15項目で前者の平均得点がわずかに高く、教材設計によって言語的な課題に左右されず学習効果を引き出せる可能性が示された。さらに自由記述の分析では、「備蓄の確認」「家族との連絡方法の決定」「家具の固定」等家庭での具体的な行動が挙がり、学校での学びが家庭での準備行動につながる事が確認された。

全学年を対象とした避難所運営に関するシナリオ学習では、外国にルーツのある生徒において「協力・思いやり」や「公平な運用」への言及が増加した。イラスト等による視覚的支援や仲間との対話を中心とした授業設計により、防災を自分事として捉えやすくなったことがうかがえる。一方、避難所運営の初歩的な理解は進んだものの、「公正・優先」や「役割・運営」の具体像を描く段階には課題が残った。今後は、HUG等を活用した意思決定の体験的学習を取り入れる等の改善が求められる。

以上より、外国にルーツのある児童・生徒に対しても、言語的な課題に左右されず学びが保障され、行動につなげることを可能にする授業設計は有効であることがわかった。同時に、判断する場面を含む授業設計は、児童・生徒の自律的判断や協働的な行動の形成にも寄与することが示された。

なお、外国にルーツのある児童・生徒の家庭では、本人が日本語を話せても家族が話せない場合は少なくない。こうした家庭への防災啓発の観点からも、災害時に命を守るために知っておくべきことを、言語的な課題に左右されず学べる授業設計の工夫が必要である。防災に関する知識や情報の不足によって命が失われる事態を防ぐためにも、誰一人取り残さない防災教育は、極めて重要である。

2 判断する場面を設定した実践的な授業と、避難訓練の計画・立案

教育現場で防災学習を進めるにあたり、知識や技能の習得だけではなく、実際の災害発生時に児童・生徒が主体的に判断し行動する力を育成することが課題となっている。

A中学校では、全学年を対象に、ロールプレイやシナリオ型学習を取り入れ、正解のない課題に対して納得解を導く授業を設計し、効果検証をした。個人での判断、事例カードによる知識の習得、班内での合意形成、全体共有という段階的なプロセスを設定し、生徒が主体的に判断し行動する力の育成を図った。その結果、授業後の振り返りでは「思いやりを大切に自分たちが運営する」や、避難所の資源が不足する状況を想定し「自分の分は自分で用意する」という記述が多くみられ、主体的に避難所運営に関わろうとする意識が芽生えていることが確認された。設営やルールづくり、環境整備など、運営側に立つ視点を育成するためには、HUG等を通して意思決定を体験することや、地域と連携した防災学習に取り組むことなど、今後の発展が求められる。

また、B中学校では、事前学習と訓練を連動させながら、「傷病者発生を想定し、声掛けや臨機応変な判断が求められる場面を設定した垂直避難の訓練」を計画し、効果検証をした。余震の想定、情報伝達、傷病者発生、屋上への垂直避難のそれぞれの場面で、状況に応じた判断が求められるように設定した。傷病者対応については、「呼吸・脈・意識の確認→応急手当や情報伝達」という最小限の手順のみを共有し、訓練の中で、その場の判断を促した。訓練後のアンケート調査では、生徒・教職員ともに、すべての項目で事前より事後の平均値の上昇が見られた。自由記述では、「頭を守る→机の下に隠れる→走らない→余震に注意する→落下物を避ける→手すりを持つ→屋上へ避難する」のように、複数の行動をつなげて記述される傾向へと変化し、行動の定着が確認された。また、次回に向けた改善提案も多く挙げられ、受動的な「やらされる」訓練ではなく、主体的に訓練に参加したことがうかがえた。

3 今後の展望

これまでの効果検証を踏まえ、研究の目的である「児童・生徒が自然災害や身近な危険に備え、主体的に“判断し行動できる”力を育成する」ために、今後実現をめざす防災教育を以下に提言する。

【提言1】実践的な避難訓練を実施・継続する

実践的な避難訓練に、継続して取り組む必要がある。従来のように、過去に作成されたマニュアルに沿って型どおりに実施する訓練を繰り返しても、実際の災害発生時に十分機能するとは限らない。

本研究では、B中学校において、実際に起こりうる情報共有や傷病者対応の場면을訓練に組み込み、判断を伴う状況を意図的に設定した。また、「訓練のための訓練」に陥ることを避けるため、詳細なシナリオは訓練の運営に関わる担当者だけが共有し、参加者にとって不確実な要素を部分的に残す設計とした。実施前には教職員に不安が生じたが、不確実な状況に直面する際に不安や戸惑いが生じることは自然な反応であり、どの現場にも起こり得る。しかし、当日は教職員が臨機応変に対応を積み重ね、現場の判断によって安全確保を進めた。あわせて、多くの前向きな課題が抽出され、実践を通して初めて見えてくる課題や論点が存在すること、そして経験の蓄積こそが、訓練の有効性を高める鍵であることが確認できた。

さらに、津波到達までの猶予が極めて短い松阪市外の沿岸地域の学校現場からは、「災害時に最大の不安要素となることは、未経験の状態でも訓練もせず、放置してしまうことだ。たとえ課題があったとしても、気づきを得られるのなら行動へ移すべきである。」という示唆が得られた。これは、地域特性を踏まえた訓練を設計することと、主体的な判断を促す訓練を実施することの重要性を裏付けるものである。

以上より、従来型の一律的な訓練ではなく、児童・生徒と教職員の双方に主体的な判断が求められる「実践的な避難訓練」を、市内全域で継続的に展開することが望ましい。その際、各校の地理的条件や校舎の設備、避難経路などに応じたシナリオを検討し、訓練前後の調査による効果測定や、振り返りの記述をもとにした改善のサイクルを取り入れることで、実際の災害時に機能する判断力や実行力の底上げが期待される。

【提言2】すべての児童・生徒が思考できる防災学習を設計する

あらゆる災害から、すべての児童・生徒の大切な命を守ることを最優先にした防災学習に取り組むことは大前提である。しかし、昨今では外国にルーツのある児童・生徒等が在籍し、従来の指導法だけでは、学習内容の十分な理解や主体的な思考を促すことが困難な場面が少なくない。

本研究では、A 中学校において、言語的な課題があっても、すべての生徒が深く思考できる授業設計を試みた。具体的には、視覚教材（映像・写真・図解）や、やさしい日本語での指示、1人1台端末の翻訳機能の活用、そして対話的な協働学習を組み合わせた。これらの工夫は、対象となる生徒の理解を助けるだけでなく、結果として周囲の生徒にとっても内容の整理や多角的な視点を持つ一助となり、学級全体の理解と深い思考につながった。

防災学習を実際の行動変容につなげるためには、単なる「授業への参加」に留まらず、活動内容を自分事として捉え、思考するプロセスが不可欠である。今後は、一人ひとりの言語能力や学習状況に応じて1人1台端末を有効的に活用するとともに、多様な背景を持つ児童・生徒同士が互いの視点を共有し合う授業設計を行うことが望ましい。こうした「誰一人取り残さない」視点での学びの設計こそが、実際の災害時に互いに協働し合う力や、柔軟に判断する力、実行する力の向上にも寄与するものと期待される。

【提言3】縦横に接続し系統立てた防災学習を設計する

本研究は、短期的・単発的な実践を中心とした効果検証にとどまっている。しかし、防災学習は、わかったつもりになり一時的に意識が高まればよいものではなく、日常的な備えを前提に、継続的に取り組む必要がある。さらに、知識の習得にとどまらず、実際に「知識を活用して行動できる学び」へと転換し、持続可能な形で文化として定着させていくことが重要である。

また、Ⅲ-3で述べた実践的な避難訓練の結果では、B 中学校・C 中学校ともに、第3学年の数値が相対的に高く、学習の積み上げによる効果が示唆された。このことから、防災学習を学年ごとに系統立てて段階的に積み上げる「縦の接続」と、授業で学んだことを家庭や地域へと広げる「横の展開」を整備し、年間計画に組み込む必要があると考える。こうした系統的な設計によって、継続して防災学習に取り組むことができ、実践できる学びへと深化していく。地域の避難所運営に携わることができる生徒の育成を一例に、次のような具体的設計を提案する。

系統立てた防災学習の設計例（地域の避難所運営に関する学習の場合）

①入り口（知る・理解する）

みえ防災・減災センターの「ひなんじょなんナン？」等のゲームや、慶應義塾大学SFC防災社会デザイン研究室の「4コマ漫画教材」等を活用し、避難所の基本を学ぶ。正解のない課題に対し、納得解を導く練習を行う。

②実物に触れる（現実を知る）

松阪市防災対策課の災害派遣等の体験談等リアルな話を聞く機会を設け、資源に制約があることや、衛生管理、公平性等の運営の困難さを具体的に理解する。

③設計・課題発見（図上訓練）

図上によるHUGを実施し、避難所運営全体の見通しを立て、課題に対して解決策を具体的に考える経験を積む。

④体験（リアルHUG等）

地域の方を巻き込み、図上からさらにリアルに近づいた経験をし、体験をもとに避難所運営の課題をみつけ、解決策を模索する。

⑤家庭・地域への発信

学んだことや経験、教訓等を家庭へ持ち帰ったり、地域へ発信したりし、生徒の知識の定着と経験の強化に加え、家庭・地域の防災力向上につなげる。

設計には、「判断する場面を設定する」「本物に触れ体験する」「地域と連携する」等、学習効果が高まるポイントを組み込んだ。このように系統立てて段階的に学びを積み重ねることで、学年の進級と、防災の知識や経験の蓄積が相乗的に働き、判断し行動する力の育成につながると考えられる。

これら3つの提言を踏まえた、防災学習や避難訓練等において活用可能なチェックリストを以下に示す。チェックリストの中で、達成されない項目があるとするれば、その計画には欠陥があると考えられる。改善・修正を促したい。

防災学習や避難訓練等におけるチェックリスト

実践的な避難訓練の実施	
	避難行動の目的を児童・生徒は事前に共通理解としているか。
	教職員の指示だけに依存しない訓練になっているか。
	余震や停電を想定した訓練になっているか。
	避難経路の選択やけが人対応等、児童・生徒が判断する場面があるか。
	被害状況の把握や情報共有等、教職員も練習できる訓練になっているか。
判断し行動する力を育成するための授業設計	
	実際に起こりうる地域特有の防災課題を題材にしているか。
	言葉を覚えるだけの知識伝達にとどまる授業から脱却しているか。
	防災資機材等の実物を実際に見て触れる機会があるか。
	正解のない課題に対して納得解を導く活動が取り入れられているか。

言語的な課題に左右されない教材作成	
	教材にイラストや写真等視覚的な補助があるか。
	未知のことも具体的なイメージができるよう実際の映像等を見る機会があるか。
	翻訳機能など使いたいタイミングで一人一台端末を使える環境があるか。
系統立てた防災学習の設計	
	知ること、判断すること、体験することを織り交ぜた設計になっているか。
	家庭防災につながる学習内容となっているか。
	外部機関を活用し、防災の専門家から学ぶ機会があるか。
日常から必要な危機管理意識の涵養	
	訓練時だけでなく、日常から避難経路を確保できているか。
	「落ちてこない・倒れてこない・移動してこない」を踏まえた環境になっているか。

4 研究を終えて

本研究を通して、「児童・生徒が主体的に判断し行動する力を育成するためには、判断する場面を設定した授業や実践的な避難訓練が効果的である」という仮説の妥当性が示された。学習の中に「状況に応じて判断する場」を計画的に設計することの重要性や、従来型の一律な訓練から脱却し、実践的な避難訓練に挑戦することの必要性を改めて確認した。いずれの実践においても、事前・事後の調査に見られる児童・生徒の変容は、教材や、授業・訓練の設計の工夫に応じて現れたものであり、経験の積み重ねが児童・生徒の可能性を広げることを改めて感じた。

防災学習は、命を大切にする学びの基盤である。児童・生徒が学校で防災学習を通して知識を得て、考え、経験することは、学校での学びを家庭の備えへ、さらに地域の防災・減災力の強化へとつながり、長期的には松阪市全体の防災力向上につながっていく。だからこそ、学校における防災学習の機会を、言語的な課題に左右されず保障し、誰一人取り残さない教育として取り組んでいくことが重要である。

今後も、児童・生徒とともに学びを深め、児童・生徒が主体的に「判断し行動する」力を高められる実践を、継続的に積み重ねていきたい。本研究が今後の松阪市における防災教育および防災訓練の充実・改善に寄与し、児童・生徒の命を守る実践への一助となれば幸いである。

5 参考文献

・三重県.(2014).「三重県新地震・津波対策行動計画 -わたしたちの「郷土」みえの未来を守るために今、すべきこと-

<https://www.pref.mie.lg.jp/common/content/000028823.pdf>

・文部科学省×学校安全(2019).「学校防災のための参考資料「生きる力」を育む 防災教育の展開」.文部科学省.

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2019/05/15/1416681_01.pdf

・中央教育審議会(2020).「自然災害に対する学校防災体制の強化及び実践的な防災教育の推進について」.文部科学省.

https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anzen/1422067_00001.htm

・柴田真裕,田中綾子,船木伸江,前林清和(2020).「わが国の学校における防災教育の現状と課題-全国規模アンケート調査の結果をもとに-」『防災教育学研究』1巻,1号,pp.19-30.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/rjde/1/1/1_19/_article/-char/ja/

・諏訪清二(2020).防災教育のテッパン.(株)明石スクールユニフォームカンパニー.

・松阪市防災対策課(2021)「災害にそなえる ver.2」

<https://www.city.matsusaka.mie.jp/site/bousai/sonaerubook.html>

・文部科学省防災教育・周知啓発ワーキンググループ(2021)「防災教育チーム提言」

https://www.bousai.go.jp/kaigirep/teigen/pdf/teigen_06.pdf

・内閣府中央防災会議防災対策実行会議南海トラフ巨大地震対策検討WG(2025)「南海トラフ巨大地震対策について(報告書)」

https://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/taisaku_wg_02/pdf/nankai_hokoku.pdf

・三重県教育委員会(2025)「防災ノート(中学生版) ~災害から命を守る~」

<https://www.pref.mie.lg.jp/KYOIKU/HP/bosai/68638018172.htm>

・文部科学省×学校安全(2025).「実践的な防災教育の手引き 中学校・高等学校編」.文部科学省.

<https://anzenkyouiku.mext.go.jp/mextshiryoudata/jissenbousai-ck.pdf>

Ⅰ 市内の防災学習の取組

① 様々な避難訓練

命を守る姿勢

地震発生時に身を守るための「命を守る姿勢」を習得することを目的として、頭部を守る姿勢や机の下に入る姿勢を取る練習が行われていた。訓練では、単に姿勢を取るだけでなく、後頭部を最優先に守ることや、その理由を説明して理解を深める工夫が見られた。

また、机の下に入る際には、両手で机の脚を対角に持つことが指導されていた。しかし実際の訓練では、教職員の指示を待ってから姿勢を取ったり、机の脚を十分に持てていなかったりする児童・生徒も確認された。

そのため、行動が定着するまで継続的に繰り返し練習することや、指示や目的を簡潔に伝え、誰一人取り残さない訓練を行う必要性が示唆された。



おはしもち

避難時の基本行動である「おはしもち」（押さない・走らない・しゃべらない・戻らない・近づかない）を徹底するため、繰り返し確認する訓練が実施されていた。

例えば、避難後の総評では、単に「おはしもち」を伝えるだけでなく、児童・生徒同士で話し合わせる場を設けたり、言葉だけでなく目的の理解を促すために具体例を挙げながら説明したりする等、理解を深める工夫が行われていた。

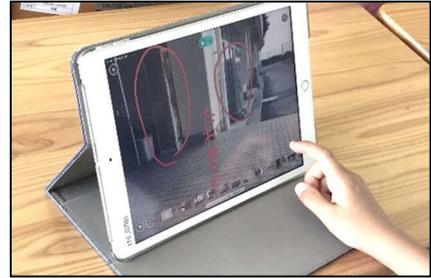


① 様々な避難訓練

危険個所の確認

避難にかかる時間を計測することを目的とする訓練が多い中で、1人1台端末を活用し、避難経路に潜む危険を確認することを目的とする訓練を実施する学校があった。

実際に避難しながら、倒れてくる物や落下物、移動してくる物を予測する訓練を行い、児童・生徒は避難中に予測した危険を端末で撮影し、仲間と共有することで事後学習につなげていた。「ここが危険です、気をつけましょう」と教わるだけでなく、児童・生徒自らが危険を予測し、考えることができていた点が特徴である。



停電や余震の想定

停電や余震が発生する状況を想定した対応を取り入れた訓練を実施する学校があった。地震に伴う停電で放送機器が使用できない場合を想定し、拡声器や非常用放送設備を活用したり、数人が校舎内を大声で伝え回ったりする工夫が見られた。

また、余震に備え、避難時に階段を使用する際は手すりを持つことを指導する等、実際の地震発生時に近い条件での訓練が実施されていた。



ライフジャケットと垂直避難

沿岸部の小学校では、1人1着のライフジャケットを常備し、津波避難を想定した訓練にライフジャケットの着用を取り入れていた。訓練では、ライフジャケットとヘルメットを着用した上で屋上への垂直避難を体験し、児童・生徒が緊急時に迷わず行動できるようにする工夫が見られた。

また、垂直避難時には長期避難を想定し、水筒を持って避難する指導も行われていた。



② 家庭や地域とつながる防災学習

親子防災教室

PTA が主催し、平日の夜の PTA 活動の一環として、保護者と児童・生徒が一緒に参加する「親子防災教室」を開催する学校があった。講師には三重県の学校防災アドバイザーを迎え、クロスロード¹⁵を通して災害対応について考え、家庭での備えや非常食の準備、災害時の連絡方法等を親子で学びながら話し合い、確認していた。

講座後には、松阪市防災対策課の協力のもと、避難所開設時に使用する資機材の取扱い訓練が行われ、夜間の灯りのない体育館で発電機を使って電気をつけ、簡易トイレの使い方を学び体験する等の機会が設けられていた。学校と家庭が連携し、防災意識を高める工夫が見られた。



CS を活用した防災学習

コミュニティ・スクール (CS) の仕組みを活用し、地域の防災士や自治会と連携した防災学習を行う学校があった。地域の防災士をゲストティーチャーとして招き、地域の防災に関する説明を受ける等した。児童・生徒は専門家から直接学び、防災の重要性を実感することで、学びを地域への貢献につなげようとする意識を高めていた。

また、人手が必要な体験型の防災学習では、地域の方に協力を依頼し、児童・生徒はより手厚いサポートを受け、地域住民も児童・生徒とともに防災について体験し学ぶ姿が見られた。



¹⁵ クロスロード: 災害対応におけるジレンマ場面を題材に、参加者が「YES/NO」で判断し、その理由を話し合う防災教育用のカードゲーム。正解が存在しない問いを通じて、多様な価値観と意思決定を学ぶ教材。

リアル HUG

発災時に避難所で起こりうる様々な状況をもとに避難所運営を考える図上訓練 HUG を、避難者役や運営役を設定し、体育館で実際に避難所運営を模擬体験する「リアル HUG」として取り組む学校があった。

運営役の生徒は避難所のレイアウトや必要な役割を考え、受付やマンホールトイレの設営等を実際に行っていた。避難者役には地域住民や下級生も参加し、地域と連携した実践的な訓練となっていた。さらに、リアル HUG の実施後には、避難所運営について地域の方と話し合う場が設けられ、得られた経験や気づきをもとに探究学習へとつなげる取組が見られた。



地域住民も参加する避難訓練

地域住民と連携した避難訓練を実施する学校があった。訓練は土曜授業の一環として、朝の登校時に地震が発生した想定で行われた。津波から避難するため、児童・生徒だけでなく地域の方々と一緒に登校し、屋上へ避難する取組であった。

避難訓練後には、心肺蘇生法や初期消火訓練、起震車の体験等に、児童・生徒だけでなく地域住民も参加できるよう工夫されていた。学校内にとどまらず、地域全体で防災力を高める取組が進められていた。



③ 外部機関を活用した防災学習

資機材取扱い訓練

松阪市防災対策課の協力のもと、防災倉庫の中を確認し、発電機や簡易トイレ、テント等の資機材の取扱い訓練に取り組む学校があった。児童・生徒は実際に操作や設置を体験し、災害時に必要な準備や対応を学んでいた。



また、マンホールトイレの仕組みや、震度5弱以上の揺れを感知すると解錠される地震自動解錠ボックスの仕組みについて説明を受けていた。防災倉庫の中を確認することで、自分自身の備えの重要性に気づくだけでなく、体験を通して「災害発生時に自分も役に立てるかもしれない」という学びにつなげていた。



起震車

三重県防災対策部の協力のもと、起震車体験を実施する学校があった。児童・生徒は、南海トラフ地震のような海溝型の揺れと、直下型地震の揺れの2種類を体験し、それぞれの特徴を学んでいた。海溝型では揺れが徐々に大きくなり長時間続くこと、直下型では一気に強い揺れが襲うことを体感し、揺れが来ると分かっているにもかかわらず踏ん張ることの難しさを実感していた。



③ 外部機関を活用した防災学習

防災食づくり

防災食づくりを取り入れる学校があった。児童・生徒は、停電を想定してカセットコンロを使用し、ポリ袋とお湯を活用した炊飯や調理をしていた。火の通りを効率化するために具材を小さく切る工夫や、断水を想定してペットボトルの水を利用する等、災害時を想定した調理方法を学んでいた。調理内容は、紙コップを活用した蒸しパンづくり、具材を細かくしたカレー、加熱時間を短縮するために水に長時間浸したパスタ料理等、多様なレパートリーがあった。児童・生徒は非常食の調理や備蓄食材を使った簡単な料理を体験し、災害時に必要な食の工夫や備えの重要性を学んでいた。



自衛隊による命を守る方法のワークショップ

自衛隊の協力のもと、止血法や搬送法を学ぶ取組を行っている学校があった。児童・生徒は、物干し竿や竹等の丈夫な棒 2本と毛布を用いて簡易担架を作成する方法を学び、搬送時の進行方向や注意点についても理解を深め、実際に体験していた。



また、身体の血液量と命に危険が及ぶ出血量を確認し、止血の必要性を理解した上で、止血法の実習を行っていた。さらに、児童・生徒は一人一本のロープを持ち、災害時に役立つロープワークを体験していた。身近な物を工夫して活用することや、実践的な技能の習得をめざした取組が見られた。



③ 外部機関を活用した防災学習

气象台による気象実験

大雨、竜巻、台風等気象災害に関する危険性や備えについて学ぶ講座を受講した後、児童・生徒は竜巻や雲の発生メカニズムを理解するための実験装置や、雨量・風向・風速を計測する装置に実際に触れながら体験し、理解を深めていた。

また、長周期振動や液状化現象の仕組みについても、実験を通して学習を進めていた。これらの活動を通じて、児童・生徒は自然現象のメカニズムを科学的に理解し、防災に必要な知識を体系的に身につけていた。



消防による濃煙体験と消火訓練

消防の協力のもと、濃煙体験や初期消火訓練を行う学校があった。児童・生徒は煙の特性について説明を受けた後、煙が充満し視界の悪い状況での避難の難しさを体感し、煙が上に行くという特性も実感していた。

また、消火器を使った初期消火の方法やポイントを学び、1人1回、水を入れた消火器を使用して、コーンを燃えているものに見立て、対象物を狙って消火する練習を行っていた。



簡易(缶易)トイレづくり

防災ボランティア「春告鳥」の協力のもと、一斗缶と段ボールを用いた簡易トイレ(缶易トイレ)づくりを体験する学校があった。単に作成するだけでなく、災害時におけるトイレの重要性や事前の備えの必要性について学んだ上で、実習を行っていた。

児童・生徒は、身近な材料を活用して災害対策が可能であることを実感し、日常生活における防災意識を高める機会となっていた。



④ 校外学習とつなげた防災学習

タウンウォッチング

松阪市地域安全対策課と連携したタウンウォッチングや、独自にウォークラリーを実施する学校があった。児童・生徒は地域を歩きながら、危険箇所や防災に関する表示・看板を確認し、災害時に役立つ情報を理解し、安全な行動を取るための視点を養っていた。さらに、実際に見つけたものや気づいたことをもとに防災マップを作成し、学びを地域の安全向上に生かす取組が見られた。



また、校外学習として防災センターや津波避難タワー等、防災に関する施設を訪問する学校があった。児童・生徒は防災設備や避難の仕組みを見学し、災害時の対応を具体的に学んでいた。



修学旅行に向けた事前学習

神戸方面への修学旅行に向けた事前学習として、系統的に防災学習に取り組む学校があった。訪問先で語り部の話を聞いたり、防災関連施設を見学したりする学びをより深めるため、過去の災害事例をもとに、災害時の被害から復興に至るまでのプロセスを学習していた。



街頭調査

校区内のショッピングモールで街頭調査を行う学校があった。児童・生徒は店長に施設の防災に関するインタビューを行い、災害発生時の避難経路や誘導方法について直接説明を受けていた。



また、買い物に訪れていた地域住民を対象にアンケート調査を実施し、地域の防災意識や商業施設の役割について考える学習を進めていた。



2 A中学校の授業で活用したキキカード

<p>1. 緊急速報アラートが鳴ったけど「様子見」</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>もう逃げられない！</p>  </div> <div style="width: 45%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>大雨の影響で、スマホの緊急速報のアラートが鳴った。でも周りが避難していないから「別にいいや〜」と私も「様子見」していた。気付いたら、川が急に増水して、逃げ道がなくなっちゃった。どうしよう…。</p> </div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・実際は、このあと逃げることができず、救助のヘリコプターで助けられた。 ・アラートは“本当に危険”というサイン。周囲に惑わされず、早めの避難を心がける。 ・川の水位や雨量予測は、インターネットで気象庁や国交省が配信している情報を確認。
<p>2. 薬を避難時に持ち出せなかった</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>薬がない！</p>  </div> <div style="width: 45%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>毎日服用している必要な薬があったけど、急いで逃げる時に持ち出せなかった。避難所では手に入らず、このままだと薬が飲めなくなってしまう。どうしよう…。</p> </div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・薬や、アレルギー対応は、個別の備えが必要。 ・非常用持ち出し袋に「1週間分の薬・処方箋のコピー」を常備。薬の名前と用量はスマホメモや紙に記録しておくといい。 ・医師や薬剤師に「災害時用の薬の備え」について事前に相談しておくで安心。
<p>3. 断水でトイレが使えない</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>トイレ我慢できない！</p>  </div> <div style="width: 45%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>トイレを使おうと思ったら、断水の影響でトイレが流れない。トイレをしようとしたら、排泄物が残ったままになってしまう。でも、もうトイレを我慢できない！どうしよう…。</p> </div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・簡易トイレ（凝固剤・袋付き）を準備しておく。ない場合は、大きなゴミ袋、新聞紙（もしくは猫用のトイレの砂）、使い捨て袋で代用できる。 ・ポータブルトイレも市販されている。 ・トイレを我慢すると、健康被害や災害関連死にもつながる。トイレの備えは必須！
<p>4. 川から離れているからと油断</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>道路が川のように！</p>  </div> <div style="width: 45%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>自分の家は川から離れているので、大雨が降っていたけど「大丈夫だ」と心配していなかった。でも、なかなか雨は止まず、田んぼや用水路の水が溢れた。家の前の道路は川みたいになってしまっている！どうしよう…。</p> </div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・「内水氾濫（排水が追いつかない水害）」にも注意が必要。 ・自分の家をハザードマップで確認し、周辺に用水路や排水路があるかを確認しておく。 ・土のうや止水板の準備も有効。
<p>5. 長靴が濡れて歩きにくい</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>足が動かない…！</p>  </div> <div style="width: 45%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>雨が降っているから、長靴を履いて避難することにした。でも雨はかなり強く、長靴の中にも雨が入ってきて足が思うように動かせない。どうしよう…。</p> </div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・大雨の場合、長靴に入り込んだ雨によって重たくなり、足を自由に動かせないことがある。「雨＝長靴」が安全というわけではない。動きやすい靴を履いて逃げるのが教訓に。 ・運動靴や防水スニーカー、替えの靴下も用意。ビニール袋を靴下の上から履くのも良い。

6. 家の周囲が洪水で閉じ込められた



近くの安全な避難所に避難しようと思ったけど、時すでに遅し…。家の周りは浸水してしまって、玄関の扉が開かなくなり、家に閉じ込められてしまった。どうしよう…。

- ・30cm 浸水すると、扉は開かなくなる。早めの避難行動が必要。ベランダや窓、2 階からの避難方法もあらかじめ検討しておくことも必要。
- ・雨が強まる前に早めの避難を!
- ・2 階や屋根に逃げるルートを確認しておく。
- ・119 や SNS で位置情報を発信すると良い。

7. 避難所で一人ぼっちで心細い



家族が近くいない状況だったけど、とりあえず一人で避難所に来た。でも、知っている地域の人がないから、頼れる人や、話せる人もいない。一人じゃ心細くて助けを求めたいのに。どうしよう…。

- ・地域の人や近所の人に、普段から挨拶し、顔の見える関係づくりをしておくことが必要。防災訓練等で地域とのつながりをつくっておく。
- ・名前カードや連絡先メモを携帯しておく。
- ・一人で抱えず「助けて」と言うことや、一人の人に声をかけるも必要。

8. 着替えやタオルが使えない



避難して、なんとかが命は守ることができ、家に戻ってきた。家が浸水してしまっていて着替えもタオルも 濡らただけで使えない。蒸し暑くて、服は汗でびしょり着替えたいのに…。どうしよう…。

- ・非常持ち出し袋に、速乾タオル、着替え、下着、ウェットティッシュを入れておくと良い。
- ・圧縮袋に入ればコンパクト&水濡れ防止。
- ・季節に合った着替えを用意する。夏は冷感シートや汗拭きシート、冬はコンパクトな防寒具やカイロがあると役に立つ。

9. 足の悪いおじいちゃんが避難を拒否



おじいちゃんは足が悪くて車いすでないと移動できない。避難が必要なのに、頑固なおじいちゃんはなかなか避難に納得してくれず、もう避難できなくなってしまった。もうすぐ家も浸水しそう。どうしよう…。

- ・直前では納得してもらえない。あらかじめ家族会議をして、事前に納得してもらう。
- ・車いすで避難するには、大雨で大変な状況になってからでは間に合わない。避難がどうしてもできない場合の選択肢は垂直避難のみ。
- ・福祉避難所や民生委員と連携するのも良い。

10. 避難所が満員で入れない



このまま家にいたら危険な状況だと思い避難したけど、避難所は人がいっぱいになっていて入れそうにない。あたりは暗くなってきているし、家にも帰れない。今日一晩をどこで過ごそう…。

- ・1つに限らず、複数の避難所を把握しておく。
- ・車中泊用グッズ(毛布、水、簡易トイレ)を常備したり、公的施設や雨風をしのげる場所も選択肢に入れることを考えたりしておく。
- ・家が危険な場合、避難所以外で避難できる場所(親戚の家等)を探しておくが良い。

11. 家が浸水し、食料が尽きた

食べ物がなくなった！



雨は止んだけど、家の一階が浸水してしまった。水が引くまで3日間かかるといわれた。その間は外に出られず、食料が全てなくなってしまった。家からはまた出られそうにない。どうしよう…。

- ・少なくとも3日分、できれば1週間分の食料と水を備蓄。レトルト、缶詰、水なしで食べられる非常食を日常的にローリングストックする。
- ・車に食料と水を入れておくのも有効。
- ・カセットコンロ等を備えておくことも必要。

12. スマホの電池が残り1%

家族と連絡取れない！



私はなんとか避難できたけど、家族は無事かな？心配だから家族と連絡を取りたい。でもスマホの電池はあと1%。モバイルバッテリーも持ってないし、しかも家族の電話番号もわからない！どうしよう…。

- ・家族で「連絡手段・避難先」を事前に共有。
- ・連絡先を書いたメモを持ち歩くことも大事。
- ・モバイルバッテリーを常にフル充電で持ち歩く。
- ・災害用伝言ダイヤル(171)やLINEのノート機能も活用。災害伝言ダイヤルを使えるよう練習。

13. 停電で真っ暗、スマホも見つけれない

真っ暗で見えない！



大雨と雷の影響で、停電し、周りは真っくら。自分のスマホを取りに行きたいけど、何がどこにあるのかも見えず動けない。どうしよう…。

- ・移動しなくても手が届く枕元や、帰宅してすぐの玄関に懐中電灯、ヘッドライトを常備する。
- ・暗闇でケガをしないようスリッパや靴も準備。
- ・簡易ランタンは、水を入れたペットボトルを懐中電灯で照らすことでつくることができる。

14. 暴風雨で眠れない

窓が割れそう…怖い！



暴風雨の予報は見ていたけど、こんなに激しくなるとは思っていなかった…。雨風は強さを増す一方。夜遅いから明日に備えて寝たいけど、雨風が強くて窓が割れそうで怖くて寝れない。どうしよう…。

- ・窓ガラスに飛散防止フィルム、段ボール、養生テープで補強。雨戸や、カーテンを閉めると良い。
- ・窓から離れたところで休むといい。
- ・窓がない部屋(トイレや廊下等)に、退避することもできる。

15. 停電で冷蔵庫の食材が心配

冷蔵庫の中身が腐る！



大雨の影響で停電してしまった。このままでは冷蔵庫の中身が腐ってしまう。昨日買い出したばかりなのに。どうしよう…。

- ・冷凍庫に保冷剤やペットボトルの氷を常備し、クーラーボックスがあると良い。
- ・扉を頻繁に開けないことで、温度上昇を防ぐ。
- ・腐りそうな食材は加熱調理して消費する。
- ・常温保存できる食糧や等も、普段から準備。

3 B中学校の避難訓練に向けた事前学習と避難訓練の詳細

けが人(傷病者)役の打ち合わせ(10月27日放課後実施)

○ねらい

- ・けが人役の生徒が、けが人封筒を用いた訓練の進め方やポイントを理解する。
- ・傷病者が発生する避難訓練は初めての取組であるため、具体的にイメージできるようになる。

○けが人(傷病者)役の選出

- ・本訓練では、各クラスから1人ずつ、けが人役を選出した。
- ・けが人役が軽い気持ちでふざけてしまうと、訓練の効果が損なわれる可能性があることから、今回は訓練の目的を踏まえ、真剣に演技に取り組める生徒を選出した。

○説明資料

<p>1</p> <p>今回のけが人が出ることを想定した訓練は、皆さんの命を守るためにとても大切な訓練です。</p> <p>けが人役をやってくれる皆さんは、その訓練を本物に近づけるために「特別な役割」を担っています。</p>	<p>2</p> <p>実際の災害では、「けがをした人をどう助けるか」が命を分けます。</p> <p>皆さんの演技のおかげで、この訓練が「ただの避難」じゃなく「命を守る練習」になります。</p>	<p>3</p> <p>今回の避難訓練</p> <table border="1"> <tr> <th>いつも</th> <th>今回</th> </tr> <tr> <td>地震発生 ↓ 揺れから身を守る ↓ 津波からの避難開始</td> <td>地震発生 ↓ 揺れから身を守る ↓ 安全確認</td> </tr> <tr> <td>※4月の訓練では農業大学校を最終目標にグラウンドまで</td> <td>※本当の地震だったらけがをする人がいるかも ↓ 津波からの避難開始 ※余震に気をつけて戻すへ</td> </tr> </table>	いつも	今回	地震発生 ↓ 揺れから身を守る ↓ 津波からの避難開始	地震発生 ↓ 揺れから身を守る ↓ 安全確認	※4月の訓練では農業大学校を最終目標にグラウンドまで	※本当の地震だったらけがをする人がいるかも ↓ 津波からの避難開始 ※余震に気をつけて戻すへ
いつも	今回							
地震発生 ↓ 揺れから身を守る ↓ 津波からの避難開始	地震発生 ↓ 揺れから身を守る ↓ 安全確認							
※4月の訓練では農業大学校を最終目標にグラウンドまで	※本当の地震だったらけがをする人がいるかも ↓ 津波からの避難開始 ※余震に気をつけて戻すへ							
<p>4</p> <p>けがを想定した訓練をします</p> <p>最近の大きな地震では、約3割～5割の人が落ちてきたり、倒れてきたり、移動してきたりした物によって、けがをしています。</p> <p>実際に地震の揺れによって、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・腰が抜けて動けなくなる ・過呼吸で立ち上がれなくなる <p>ということも、ありました。</p> 	<p>5</p> <p>けが人封筒訓練の仕方</p> <ol style="list-style-type: none"> ①訓練が始まったら、先生から各教室で封筒を受け取る。 ②地震が発生したら、各自、周りに見えないように中身を確認する。 ③揺れがおさまったら、封筒の中の紙にある役割をする。どんなけがをするかは、その時までわかりません。 	<p>6</p> <p>けが人役の演技のポイント①</p> <p>演技のポイントは、カードに書いています！</p> <table border="1"> <tr> <td> <p>ケルポーズをしているときに、顔を赤らんでしまった。意識はしていない。息が詰まって「痛い、痛い」と言いながら助けを求めている。</p> <p>【演技のポイント】 「はれでせう！」など叫びにせず、大声で助けを求めたらダメです。</p> </td> <td> <p>状態：脈水、呼吸</p> <p>指をはさんだ出血なし</p> </td> </tr> <tr> <td> <p>地震が弱くて過呼吸になっている。フラフラしているが、足元が揺れは分かる。全震や終揺れに反応して過呼吸を繰り返す。</p> <p>【演技のポイント】 呼吸器が詰まると、呼吸が止まると想定して呼吸器で呼吸する。呼吸が止まると意識がなくなり、意識が回復するまで呼吸を繰り返す。</p> </td> <td> <p>状態：脈水、呼吸</p> <p>過呼吸 怪我なし</p> </td> </tr> </table>	<p>ケルポーズをしているときに、顔を赤らんでしまった。意識はしていない。息が詰まって「痛い、痛い」と言いながら助けを求めている。</p> <p>【演技のポイント】 「はれでせう！」など叫びにせず、大声で助けを求めたらダメです。</p>	<p>状態：脈水、呼吸</p> <p>指をはさんだ出血なし</p>	<p>地震が弱くて過呼吸になっている。フラフラしているが、足元が揺れは分かる。全震や終揺れに反応して過呼吸を繰り返す。</p> <p>【演技のポイント】 呼吸器が詰まると、呼吸が止まると想定して呼吸器で呼吸する。呼吸が止まると意識がなくなり、意識が回復するまで呼吸を繰り返す。</p>	<p>状態：脈水、呼吸</p> <p>過呼吸 怪我なし</p>		
<p>ケルポーズをしているときに、顔を赤らんでしまった。意識はしていない。息が詰まって「痛い、痛い」と言いながら助けを求めている。</p> <p>【演技のポイント】 「はれでせう！」など叫びにせず、大声で助けを求めたらダメです。</p>	<p>状態：脈水、呼吸</p> <p>指をはさんだ出血なし</p>							
<p>地震が弱くて過呼吸になっている。フラフラしているが、足元が揺れは分かる。全震や終揺れに反応して過呼吸を繰り返す。</p> <p>【演技のポイント】 呼吸器が詰まると、呼吸が止まると想定して呼吸器で呼吸する。呼吸が止まると意識がなくなり、意識が回復するまで呼吸を繰り返す。</p>	<p>状態：脈水、呼吸</p> <p>過呼吸 怪我なし</p>							
<p>7</p> <p>けが人役の演技のポイント②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リアルに見せることが目的！ ただし、無理な動きや大げさな演技は要りません。 ・安全第一！ 転倒することや無理な体勢を取ることは避けましょう。 	<p>8</p> <p>けが人役の演技のポイント③</p> <p>して欲しくないこと ×</p> <ul style="list-style-type: none"> ・笑いながらふざける。 ・走り回って本当にけがをする。 ・他の生徒を驚かせるために大げさな演技をする。 	<p>9</p> <p>訓練の鍵を握っているのは皆さんの協力と本気の演技です！</p> <p>ご協力、よろしくお願いします。</p>						

○実際の様子

① 出欠確認後、避難訓練の意義や目的を確認する

- ・はじめに教頭から、けが人役として訓練に協力してくれることへの感謝を伝え、今回の訓練の意義について説明があった。
- ・今回は「傷病者が発生することを想定した避難訓練」であり、そのリアリティを高めるためにけが人役の協力が不可欠であることを伝えた。



② 訓練で想定する傷病の種類について説明する

- ・最近の大地震では、約3割～5割の人が負傷していることや、揺れに驚いて腰が抜けたり、過呼吸になったりする人がいることを紹介。
- ・実際の事例をもとに、今回の訓練では「擦り傷等の軽傷」から「動けなくなるような重傷」まで、幅広い傷病を想定していることを説明した。



③ 訓練の流れと、けが人封筒の確認方法について説明する

- ・どのけが人役になるかは事前には伝えず、訓練直前に封筒を受け取って内容を確認する形式であることを伝えた。
- ・訓練の具体的な流れや、封筒の中身の確認の仕方、演技の開始タイミングや方法について説明した。
- ・この役がいい!と前のめりの生徒もいた。



④ 演技のポイントと注意事項を確認する

- ・演技はリアルに見せることが目的だが、無理な動きや大げさな演技によって本当にけがをしないよう、安全第一で取り組むようお願いした。
- ・ふざけたりせず、真剣に演技することが訓練の質を高める鍵であることを伝え、協力を呼びかけた。
- ・緊張するけど楽しそうと話す生徒もいた。



事前学習(11月4日夕学活実施)

○ねらい

- ・避難訓練に向け、揺れから身を守る方法や、屋上への避難経路を確認する。
- ・今までの避難訓練とは異なり、傷病者が発生し安全確認を行う訓練であることを理解する。

○説明資料

1

自分となかまの命を守るために真剣に取り組もう

2

避難訓練の目的

- ・一人ひとりが揺れから身を守る行動を自らとる。
- ・校舎内にガラスや落下物が散乱していることをイメージしながら、落ち着いて屋上へ避難する。
- ・余震が繰り返し起こることを知り、手すりを持って避難する。

3

今回の避難訓練

いつも	今回
地震発生 ↓ 揺れから身を守る ↓ 津波からの避難開始 ※4月の訓練では農業大学校を最終目標にグラウンドまで	地震発生 ↓ 揺れから身を守る ↓ 安全確認 ※本当の地震だったらけがをする人がいるかも ↓ 津波からの避難開始 ※余震に気をつけて屋上へ

4

揺れから身を守る

緊急地震速報が聞こえてきたら…
先生の指示を待つのではなく、自分で考え判断して
身を守る姿勢をとりましょう!



5

揺れから身を守る

サルのポーズ(机がある時)

1. 机の下にもぐって頭を守る。
2. 両ひざを床につけて、机の脚の上の方を斜め(対角)に持つ。



- ※体全体が机の中に入らない時は、頭を最優先で守る。
- ※机の下では体育座りよりひざを床につける方が安定する。
- ※机の脚を持っていないと、机が大きく動いたり飛び跳ねたりすることがあるので危険。
- ※机が大きくて両手が届かない場合は、机の脚のひとつを両手でしっかりと持つ。

6

揺れから身を守る

ダンゴムシのポーズ(机がない時)

1. 安全な方に頭を向ける。(危険な方にお尻を向ける)
2. ひざと足の甲を床につける。
3. 両手で頭を守る。(手を水をすくう形にして後頭部に当てる)



- ※物が倒れたり、落ちたり、移動してきたりしない場所で行うことを前提としている。
- ※床に頭をつけると、揺れの衝撃で床に頭を打つ可能性があるため、頭は少し浮かすと良い。

7

安全確認(けがを想定した訓練)

近年発生した大きな地震では、約3割~5割の人が落ちてきたり、倒れてきたり、移動してきたりした物によって、けがをしています。

実際に大地震が起きたら、教室内で、けがをする人がいるかもしれません…。その時は、皆さんの助けが必要です。



8

安全確認(けがを想定した訓練)

今回の訓練では、けが人役を頼んでいます。(けが人役の人は、真剣にけが人役を務めてくれます)



けが人役の人が、どんなけがをするのかは、訓練の時までわかりません。声をかける、状況を先生に伝える、できる範囲で助けるなど、慌てず、落ち着いて、気づいたことを行動に移す練習をしましょう。

9

津波からの避難

三雲中学校では、津波の危険がある場合、農業大学校、中勢バイパス、屋上のいずれかに避難します。

今回は、「農業大学校への避難が間に合わないため、屋上へ避難する」という想定で訓練を行います。



10

津波からの避難

- ・1階にいる3年生から順に避難します。
- ・避難時は、整列する必要はありません。扉に近い人から「東階段」を使って、屋上まで落ち着いて避難しましょう。(中央階段と西階段は緊急用などで使います。)
- ・避難が始まるまでは、その場で、自分の身を守る姿勢をとって待ちましょう。

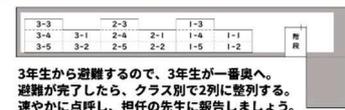
11

津波からの避難

- ・津波からの避難は、長期避難も考えられるので、水筒(必要であれば防寒具)を持って屋上へ避難をします。
- ・2、3年生は体育館シューズに履き替えましょう。
- ・移動教室の場合は、一度、自分の教室へ戻り水筒を持ってから避難します。移動教室から教室へは「中央階段」を使い、教室から屋上へは「東階段」を使って移動しましょう。

12

津波からの避難



3年生から避難するので、3年生が一番奥へ。避難が完了したら、クラス別で2列に整列する。速やかに点呼し、担任の先生に報告しましょう。



避難中に気をつけること

今回は、屋上へ避難しますが、避難中にも地震（余震）が繰り返起こる可能性があるため、余震に気をつけて避難する必要があります。

※東日本大震災では地震が発生した日に震度1以上の地震が約1600回、能登半島地震では地震が発生した日に震度1以上の地震が約950回起きました。



避難中に気をつけること

余震に備えるためにできること

- ・階段では、焦らずゆっくり落ち着いて手すりを持って避難しましょう。
- ・余震が起きたら、その場で姿勢を低くして頭を守りましょう。



避難するときは、落ちてきそうなものや、移動してきそうなもの、割れそうなガラスなど、どんな危険があるか見つけられると対策に繋がりますね！

最後に

- ・けがを想定することも、全校生徒が屋上へ避難することも、初めて行います。
- ・うまくいかないこともあるかもしれませんがこれからは繋がる課題を見つけるための訓練でもあります。
- ・一人ひとりが真剣に取り組み、自分や仲間の命を守るための訓練にしましょう。

○実際の様子

① 避難訓練の目的や、今回の訓練の流れを確認する。



今まで行っていたような、揺れから身を守り、揺れがおさまったらすぐに避難する流れではなく、揺れがおさまった後、安全確認をしてから、屋上へ避難することを確認した。

② 揺れから身を守る姿勢について確認する。



机がある場合のサルのポーズ、机がない場合のダンゴムシのポーズを、ポイントを伝えながら確認した。実演しているクラスもあった。

③ 実際の地震では揺れによって傷病者がでること、起こりやすい病状を確認する。



実際に地震が起きた時に、まわりにけがをする人がいる可能性があること、どんな怪我が考えられるかを確認した。

④ 避難経路や、避難時に気をつける事を確認する。



長期避難に備えて水筒や防寒具を持つこと、避難中に起こるかもしれない余震に備えて手すりを持って避難すること等を確認した。

けが人封筒訓練の仕方

①訓練が始まったら、授業者はけが人役生徒に封筒を渡す。

学年ごとに
重症度のバランスは
考えて用意します。



②揺れがおさまったらけが人役生徒が演技を始めるので、けがの重症度を判断し、対応する。

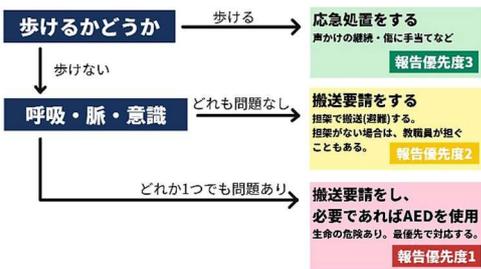
③学年の先生(情報収集係になった先生)に、けが人がいること、けがの様子(重症度)を報告する。
応援必要なし ... 「〇組、無事です！」
応援が必要 ... 「〇組、応援をお願いします！
(けがの状況を伝える)」

訓練中に傷病者が発生する場面になるまで、傷病者役の生徒も、教室にいる教職員も、どのような傷病者が発生するか分からない訓練設計にした。これは、現場の状況に応じた判断力と連携の重要性を訓練の中で体験できるよう工夫するための工夫である。

授業者には、揺れが収まった後、けが人役の生徒の状況を確認し、傷病の重症度と搬送の必要性について判断するよう求めた。

軽傷であり、教室内で対応可能な場合は「〇組、無事です」と伝え、搬送や応援が必要な場合には「〇組、応援をお願いします」と簡潔に情報収集に来た教職員へ伝達するようにした。

けが人の重症度と報告順位



けが人の発見 → 声かけ → 重症度判断
→ 応急処置・共有 → 必要に応じて搬送

判断の目安として、「自力で避難可能かどうか」「呼吸・脈・意識の有無」の2点を確認するよう指示した。

呼吸・脈・意識のいずれかに異常がある場合は、命に関わる可能性があるため、最優先で本部へ報告し、対応を行う。これらに問題はないが自力で避難できない場合は、担架または抱えて搬送する。自力で歩行可能な場合は、教室内で簡単な止血等の対応を行うこととした。なお、今回は傷病者を想定した初めての訓練であるため、命に関わる重篤な傷病は設定しなかった。

空いてる先生方の協力者カード



(協力者カードは巻末付録にて詳細参照)

授業を担当していない教職員には、事前に役割を割り当てることも可能であるが、実際の災害時には、誰がその場にいるか、何が起こるかを事前に把握することは困難である。

そのため、今回はあえて事前の役割分担を行わず、実際の状況に近づける工夫をした。

具体的には、確認すべき事項や必要な役割や行動を記載した「協力者カード」を作成し、訓練当日にその場にいる教職員へ状況に応じて配布した。これにより、状況把握や傷病者の搬送等、必要な支援を柔軟に行える体制を構築した。

4 B中学校の避難訓練で活用した協力者カード

災害発生時に教職員が実施すべき最低限の行動を明確にし、それぞれの行動を個別の「協力者カード」として整理した。災害時は、教職員が心理的動揺や情報過多によって必要な行動を失念する可能性も考えられるが、どのような状況においても行動の漏れや遅れが生じないように、視覚的に確認できる形式で作成した。

訓練では、事前に特定の教職員へ役割を固定的に割り当てる方式ではなく、その場に居合わせた教職員がカードを確認し、即時に行動を引き受けられるように設計した。これにより、状況に応じて役割を柔軟に担える体制を構築し、災害対応の実効性を高めることを意図している。

情報収集（1階）
「負傷者の有無」と「校舎の状況」を速やかに把握し、本部に報告。
<ul style="list-style-type: none">・ 搬送が必要な大怪我をしている生徒がいないか・ 自力で避難できない生徒がいないか・ 避難時に通れない通路がないか

情報収集（2階）
「負傷者の有無」と「校舎の状況」を速やかに把握し、本部に報告。
<ul style="list-style-type: none">・ 搬送が必要な大怪我をしている生徒がいないか・ 自力で避難できない生徒がいないか・ 避難時に通れない通路がないか

情報収集（3階）
「負傷者の有無」と「校舎の状況」を速やかに把握し、本部に報告。
<ul style="list-style-type: none">・ 搬送が必要な大怪我をしている生徒がいないか・ 自力で避難できない生徒がいないか・ 避難時に通れない通路がないか

情報収集（新館）
「負傷者の有無」と「校舎の状況」を速やかに把握し、本部に報告。
<ul style="list-style-type: none">・ 搬送が必要な大怪我をしている生徒がいないか・ 自力で避難できない生徒がいないか・ 避難時に通れない通路がないか

情報収集（体育館）
「負傷者の有無」と「校舎の状況」を速やかに把握し、本部に報告。
<ul style="list-style-type: none">・ 搬送が必要な大怪我をしている生徒がいないか・ 自力で避難できない生徒がいないか・ 避難時に通れない通路がないか

情報収集（武道場）
「負傷者の有無」と「校舎の状況」を速やかに把握し、本部に報告。
<ul style="list-style-type: none">・ 搬送が必要な大怪我をしている生徒がいないか・ 自力で避難できない生徒がいないか・ 避難時に通れない通路がないか

情報収集（技術棟）

「負傷者の有無」と「校舎の状況」を速やかに把握し、本部に報告。

- ・搬送が必要な大怪我をしている生徒がいないか
- ・自力で避難できない生徒がいないか
- ・避難時に通れない通路がないか

情報収集（屋外）

「負傷者の有無」と「周囲の状況」を速やかに把握し、本部に報告。

- ・グラウンドとテニスコートを確認する
- ・搬送が必要な大怪我をしている生徒がいないか
- ・自力で避難できない生徒がいないか
- ・避難時に通れない通路がないか

4階 屋上扉

屋上の扉の前に立つ。
足元に注意することを促す。

- ・屋上に出る扉の前に立って押さえ、風で扉が閉まることを防ぐ。
- ・屋上に出る際、足元の段差に注意し、速やかに出ることを促す声掛けをする。

屋上 開錠

屋上に出る扉の鍵を開錠する。

- ・屋上の鍵は、職員室キーボックス内と、屋上入り口横、開錠ボックス内にある。
- ・屋上を開錠し、避難できる準備をする。

東階段（1階）

安全に避難できるよう、
声掛けをする。

- ・「手すりを掴み落ち着いて避難する」ことの声掛けをする。
- ・避難中に余震が起きた際、「その場で姿勢を低くして頭を守る」ことの声掛けをし、自分自身も身を守る。

東階段（2階）

安全に避難できるよう、
声掛けをする。

- ・「手すりを掴み落ち着いて避難する」ことの声掛けをする。
- ・避難中に余震が起きた際、「その場で姿勢を低くして頭を守る」ことの声掛けをし、自分自身も身を守る。

東階段（3階）

安全に避難できるよう、
声掛けをする。

- ・「手すりを掴み落ち着いて避難する」ことの声掛けをする。
- ・避難中に余震が起きた際、「その場で姿勢を低くして頭を守る」ことの声掛けをし、自分自身も身を守る。

中央階段（1階）

安全に避難できるよう、
声掛けをする。

- ・「手すりを掴み落ち着いて避難する」ことの声掛けをする。
- ・避難中に余震が起きた際、「その場で姿勢を低くして頭を守る」ことの声掛けをし、自分自身も身を守る。

中央階段（2階）

安全に避難できるよう、
声掛けをする。

- ・「手すりを掴み落ち着いて避難する」ことの声掛けをする。
- ・避難中に余震が起きた際、「その場で姿勢を低くして頭を守る」ことの声掛けをし、自分自身も身を守る。

中央階段（3階）

安全に避難できるよう、
声掛けをする。

- ・「手すりを掴み落ち着いて避難する」ことの声掛けをする。
- ・避難中に余震が起きた際、「その場で姿勢を低くして頭を守る」ことの声掛けをし、自分自身も身を守る。

非常用持出袋

職員室から非常用持出袋と、
救急箱を避難先に持っていく。

- ・職員室から、非常用持出袋と救急箱を避難場所へ持っていく。
- ・その他必要な物があれば、運べる範囲で持ち出すが、運搬時に余震が来ることを考慮し、必要最低限にする。

AED

職員玄関前から、
AEDを避難先に持っていく。

- ・職員玄関前から、AEDを避難場所へ持っていく。AEDは体育館入り口にもある。
- ・その他必要な物があれば、運べる範囲で持ち出すが、運搬時に余震が来ることを考慮し、必要最低限にする。

担架(職員玄関前)

搬送が必要なけが人がいる場合、
けが人がいる場所へ担架を運ぶ。

- ・搬送が必要なけが人や体調不良者がいる場合、担架を持っていき、搬送する。
- ・職員玄関前の担架を持っていく。
- ・搬送時は高い方に頭、低い方に足を向け上げ下ろしはゆっくり行う。

担架(校長室前)

搬送が必要なけが人がいる場合、
けが人がいる場所へ担架を運ぶ。

- ・搬送が必要なけが人や体調不良者がいる場合、担架を持っていき、搬送する。
- ・校長室前の担架を持っていく。
- ・搬送時は高い方に頭、低い方に足を向け上げ下ろしはゆっくり行う。

協力者カードは、印刷後にラミネート加工を施し、裏面に磁石を取り付けた上で、ホワイトボードに掲示して職員室内に常時設置している。これにより、教職員が平時から容易に確認でき、災害時にもすぐに手に取って行動へ移すことが可能となる環境を整えた。



5 授業で活用した教材のリンク集

実践と考察 1 A中学校1年生の防災学習

・第一次 「大雨から身を守るための備え」

NHK for School 「よろしく!ファンファン 自然災害とともに生きる-水害-」 https://edu.web.nhk/school/watch/bangumi/?das_id=D0005120476_00000	
--	---

・第二次 「地震から身を守るための備え」

NHK for School 「キキとカンリ 地(じ)しんのときの行動」 https://edu.web.nhk/school/watch/bangumi/?das_id=D0005170890_00000	
内閣府 「南海トラフ巨大地震編 シミュレーション編」 https://wwwc.cao.go.jp/lib_012/nankai_02.html	

実践と考察 2 A中学校全学年の防災学習

・第一次 「大雨から身を守るための備え」

慶応義塾大学 SFC 防災社会デザイン研究室 「4コマ漫画教材」 https://bosai.sfc.keio.ac.jp/column-4koma	
--	---

防災学習で活用できる資料

<p>ひなんじょなんナン? https://midori.midimic.jp/bousai_gensai/gamedvd/gamedvd.html</p>	
<p>三重県教育委員会 「防災ノート」 https://www.pref.mie.lg.jp/KYOIKU/HP/bosai/68638018172.htm</p>	
<p>東京都教育委員会 防災教育ポータルサイト 「防災学習に役立つリンク集」 https://www.anzenedu.metro.tokyo.lg.jp/link/</p>	
<p>防災教育チャレンジプラン 「防災教育に役立つリンク集」 https://www.bosai-study.net/link/</p>	

【研究協力校】

松阪市立久保中学校

松阪市立三雲中学校

【松阪市子ども支援研究センター】

中西 祐司	脇 清人	川西 雅之
河合 春樹	刀根 曜	廣瀬 有一
辻本 泰介	森口 真嗣	青木 駿介
沖林 恵美子	小筆 邦昭	野呂 郁子
田口 寛人	早川 尚子	佐波 允友
河田 麻佑		

【指導者】

廣瀬 有一

【執筆者】

河田 麻佑

研究集録 第150集

発行 令和8年(2026年)3月
発行所 松阪市子ども支援研究センター
松阪市川井町690番地1
TEL 0598-26-1900
FAX 0598-26-1901